L6F-50

文學博士 井上哲次郎著

倫理と宗教との關係 全

東京 合資會社 富山房發兌

文學博士 井上哲次郎著

帝國圖書館藏

倫理と宗教との關係 全

帝國圖書館藏

東京 合資會社 冨山房發兌

倫理と宗教との關係序

我邦維新以來の文明は、先づ物質的方面より起り來たれり、是れ固より其自然の順序なり、然れども一たび發展し始めたる文明は、決して此に止まるべきものにあらず、必ず延ひて倫理宗教等の如き精神的方面に及ばざるべからず、然るに事實は果して之れを證せり、今や倫理宗教等に關して其取るべき主義を一定せざるべからざる時機に際せり、是れ獨り個人に就いて言ふべきのみならず、又國民に就いて亦然か言はざるべからざるなり、余や淺學菲才、固より此の如き重大の任に當るとはいはず、然れども年來哲學、宗教、倫理等を研究しつゝあるの結果として、聊、此に見る所あり、因りて去年

の夏之れを發表せんと欲し、筆を執り稿を起しゝも、餘事の之れを妨くるものありて、半途にして廢せり、然るに今年の夏、匆忙の間、僅に餘暇を偷んで、殘餘の分を草するを得たり、即ち第一章より第五章に至る迄は去年の稿に屬し、第六章以下は今年の稿に屬す、稿成りて又之れを考ふるに、固より未だ余が意に滿たず、尙ほ幾多の時日を得て校讐するの機會あらんことを欲す、然れども歲月眞に流水の如く、逝くものは斯の如きかの歎なきを得ず、故に姑く之れを印刷に付し、以て廣く世の識者に問ひ、他日更に機會を得て、校讐することあらんことを希望するに至れり、最後に附錄とせる「宗教の將來に關する竟見」は曾て哲學雜誌第百五十四號に掲載せるものにて、固より瑣々たる論文なれども、幸に我學術界の注目する所となり、之れに關する世の批評駁論等も少からざるが故に、參考の爲めに之れを附載することゝせり、其中本書の旨意と相映發する所なきにあらざるが故に、是れ亦一讀の勞を辭せざらんことを庶幾す、是れを序となす、

明治三十五年八月廿八日

井上哲次郎識

倫理と宗教との關係

目次

第一章　叙論……一
第二章　倫理學者の謬見……五
第三章　宗教家の謬見……二三
第四章　倫理の根柢……三九
第五章　宗教の根柢……五六
第六章　宗教と道德……七三
第七章　理想的宗教即ち理想教……九三
第八章　結論……一一二
附錄　宗教の將來に關する竟見……一一五

倫理と宗教との關係

文學博士　井上哲次郎著

第一章　叙論

倫理といひ、宗教といひ、何れも人生に關する重大の問題なるを以て嚴肅なる思想あるものは、一日も之れが解決を要せざるはなし、然るに我邦現今の情態に就いて之れを考察するに、倫理と宗教との問題ほど錯雜紛亂して、人の頭腦を惑はし易きものはあらず、苟も人にして倫理と宗教とに於て惑ふ所あらば、其意志は正確なる目的を有すること能はざるが故に、行爲として顯はれ來たるものは、怪譎醜陋ならざるを得ず、今や社會各種の現象之れを證して餘りありといふべし、此の如くにして之れを自然の經過に一任せば、遂に如何なる不祥の結果を生ずるや

を保し難きは、何人も容易に首肯する所なるべし、此れ倫理と宗教との問題の決して度外視すべからざる所以なり、先づ如何にして倫理と宗教との問題が特に今日嶷々然として人の耳朶を打つに至りしかを回顧するに、我邦本と武士道あり、儒教あり、佛教あり、國民の道德心此によりて養成せられ、千年以上の歲月を經來たれり、然るに維新以來西洋の文物輸入せらるゝに從ひ、變動は獨り物質上に止まらず、又精神上に及べり、即ち基督教に接して宗教の選擇に惑ひ、倫理學に接して倫理の選擇に惑へり、宗教としては已に神道あり、儒教あり、佛教あり、儒教は必ずしも宗教と同一視すべからざるも、其形式は宗教と異ならず、然るに今又基督教の入り來たれるあり、是に於てか神道を取らんか、儒教を取らんか、佛教を取らんか、將た又基督教を取らんか、多岐亡羊、人皆其適從する所を知らず、假令ひ惑はざらんと欲するも、豈に得んや、倫理としては已に武士道の外儒教佛教等の教訓あり、然るに今又基督教の外倫理學の入り來たれるあり、若し倫理學にして數學若くは物理學の如く確定し得らるゝものならば、之れに據るを得べきも、奈何せん其取る所の道德主義に至りては、千差萬別にして、毫も一定せざるを、乃ち利己主義あり、利他主義あり、快樂主義あり、克己主義あり、進化主義あり、直覺主義あり、殆んど枚擧に遑あらず、此の如く種々なる道德主義ある以上は、其何れをか取りて實行すべき、是れ何人も遲遲せざるを得ざる最初の困難なり、然れども各種の道德主義を比較考察して、其取る所を一定するは、尋常人の爲し能ふ所にあらず、是を以て惑へるなり惑へるが故に實行擧らず乃ち朦朧として暗中に摸捉するの感なくんばあらざるなり、假令ひ各種の道德主義を比較考察し、自家の立脚點を發見したりとするも、之れを實行するの精神は未だ必ずしも十分の活氣を伴ふものなるを保せず、果して然らば如上の活氣はいかんして之れを得べきか、是れ亦吾人の深く思慮を加へざるべからざる所なり、之れを要するに、倫理と宗教との問題は、日本國民の前途に横れる難關なるに相違なし、然るに吾人は聊か此問題に就いて見る所あり、因りて左に其梗槪を叙述し、

以て名教に志ある學者の參考に供せんと欲するなり、

第二章　倫理學者の謬見

倫理學は古來哲學若くは宗教の範圍に屬し、其基礎を經驗以外に置くことゝなれり、然るに近來自然科學の勃興してより、殊に十九世紀の後半よりして、自然科學の結果の光耀ある、哲學も宗教も殆んど自然科學の後に瞠若たるが如き着なしとせず、ダーウヰン氏が進化論を主張するに及び、此傾向は一層甚しく、遂に心理學をも自然科學の方法により て研究することゝなり、又倫理學をも哲學若くは宗教より離して獨立せしめ、心理學と同じく自然科學の方法によりて研究し、純然たる一箇獨立の科學とせんとするもの、往々にして之れあるに至れり、若し此事にして成功せば、倫理學も一箇の自然科學として成立せん、然れども倫理學てふものが、元來自然科學と同一の性質のものなりや否やに就て頗る疑なき能はず、倫理學は果して自然科學と同一視すべきものなるか、之れを自然科學と同一視するは一時學者の謬見にして、自然科學の

成功に眩したる結果に出づるなきか、吾人は竊に其然るを信じて疑はざるものなり、さはいへ、倫理學をして哲學若くは宗教以外に獨立せしめんとすること必ずしも非なりといふを得ず、何故なれば、哲學の組織種々あり、カントはカント、ヘーゲルはヘーゲル、ショッペンハウエルはショッペンハウエル、各〻其一家の哲學組織あり、故に哲學的倫理學を講ぜんとならば、如何なる哲學組織によるべきか、あらゆる哲學組織を研究して然して後其取るべきものを確定し、然して後倫理學を講ずるならば、是れ自然の順序なるべきも、是れ容易の事にあらず、哲學組織は哲學者出づる毎に增加するものなるが故に、之れを研究すること歲と共に困難なるべきなり、是故に若し哲學組織を離れて倫理學を講ずるを得ば、專ら力を此學に用ふるを得べく、從つて其進步も亦期待するを得べきなり、且つ又倫理學を宗教より引きはなすこと、大に好し、何故なれば、佛教にせよ、基督教にせよ、其中に永遠不滅の眞理あるは、之れを認容すべきも、又無數の迷信之れに附隨して發達し來たれり、若し是等無數の迷信を除去するを得ば、甚だ好都合なるべきも、是れ到底出來得べきことにあらず、若し假りに是等無數の迷信を除去するを得とせば、佛教も佛教たるを得ず、基督教も基督教たるを得ざるなり、佛教と基督教とは迷信と斷つに斷つべからざるの關係を有せり、然れども斯る理由によりて迷信を保護するを得ず、迷信は文明の敵なり、智識の害なり、之れを除去するは進步を促す所以なり、然るに若し倫理學の基礎を歷史的の宗教に取らば、其宗教に附隨せる無數の迷信も亦必ず附隨し來らん、是故に倫理學をして、宗教以外に獨立せしめんこと、亦た不可なりとすべからざるなり、是等のことを外にして自然科學的の研究の精神が大に倫理學を裨益せしこと、實に顯著なる事實なりとす、殊に倫理的事實に關する人類學的研究及び倫理的理論に關する心理學的研究の如きは、倫理學の建設に正確なる資料を供給すること大ならずとせざるなり、

吾人は十分に是等の事實を認容すと雖も、倫理學が到底心理學と一樣

に取り扱はるべきものなることを信ずること能はず、請ふ少しく其理由を說かしめよ、自然科學は皆自然現象の學なり、自然現象の中に就いて理法を發見することを務むと雖も、是れ自然現象を說明せんが爲めなり、理法其物が自然科學の目的たるにあらず、目的は自然現象を說明するにあるなり、然るに心理學も亦之れと異ならず、心意其物は自然と相對すと雖も、心的現象は亦自然界に於ける一種の現象なり、自然科學は自然現象の學にして、心理學は心的現象の學なるが故に、其現象の學たるの一點に於ては、毫も異なるところなきなり、又夫の社會學の如きも、社會的現象の學なるが故に、自然科學と同一の性質を有するものなるを知るべし、是故に心理學の如き、社會學の如き、皆自然科學の研究法を應用して、着々功を奏しつゝあるなり、然らば倫理學はいかん、吾人の見る所によれば、倫理學は心理學若くは社會學とは大に異なれる結果を生じつゝあるが如し、心理學といひ、社會學といひ、人によりて立論の差異あるは、固より其然るべき所なれども、已に各一箇普遍の科學となれり、心理學は誰れの心理學といふにあらずして、人類一般の心理學なり、社會學は誰れの社會學といふにあらずして、人類一般の社會學なり、倫理學も亦人類一般の倫理學といふべからざるか、何ぞ必ずしもいふべからざらん、然れども是れ唯名のみなり、倫理學にありては利己主義といひ、利他主義といひ、快樂主義といひ、克己主義といひ、樂天主義といひ、厭世主義といひ、其他何といひ何といひ、根本主義に於て全く正反對をなせるもの、滔々として皆是れなり、此の如くなれば、人類一般はおろか、唯一家言あるのみ、社會學の如きは、尙ほ幼稚の學科たるを免れずと雖も、根本的に相容れざること、未だ此の如きの甚しきに至らざるなり、況んや心理學をや、

然れども倫理學の心理學若くは社會學と同一視すべからざる所以のもの、尙ほ他にあるなり、何ぞや、心理學も、社會學も、皆特殊の現象を解釋する理論的の學科なり、即ち心理學は心的現象を解釋するを以て其職分とし、社會學は社會的現象を解釋するを以て其職分とす、倫理學も亦

此の如き學科なりや否や、或るものは「然」りと答へん、倫理的事實は人類學的に又社會學的に之れを研究するを得べく、倫理的理論は又心理學的に研究するを得べし、故に倫理學にも心理學若くは社會學と同一の研究法によりて研究し得べき範圍は勿論之れあるなり、然れども夫等は皆人類學、社會學若くは心理學の一部分にして、倫理學特有の範圍は恐くば發見すること能はざらん、若し倫理學が心理學若くは社會學の如く特殊の現象を解釋する理論的の學科ならば、姑く是等の學科と同一視することを認容せん、然れども倫理學てふ科學は、純然たる理論的の科學なるか、いかん、倫理學は理論的の學科にして、同時に又實行的の學科なり、是れ其心理學若くは社會學と大に其性質を異にする所なり、倫理學は道德的行爲の法則に關する學科なり、故に其研究の結果は實行を左右するに足るものならざるべからず、是を以て冷淡なる分解的認識の單に理論的價値を有するものと同日の談にあらざるなり、倫理學は寧ろ論理學若くは政治學と比較するを得べし、論理學も政治學も、皆理論と實行とを合一せる學科なり、倫理學を規範的科學normative Wissenschaftと稱するも、畢竟實行の法則を確定するを以て其の職分とするが故なり、心理學若くは社會學は說明的科學explicative Wissenschaftにして、規範的科學にあらず、倫理學の心理若くは社會學と同一視すべからざる所以のもの以て知るべきなり、

倫理學が理論と實行とを合一する點に於ては、論理學若くは政治學に比すべしと雖も、其實行の精神に至りては、必ずしも同一視すべからざるものあり、論理といひ政治といひ、皆人生に取りて重大の事件たるに相違なきも、未だ倫理の如く深く各個人の品性上に關係するものはあらず、論理若くは政治を能くするの力なしとするも、其人の品性は未だ必ずしも價値なしといふを得ず、然れども倫理に背戻し、道德に叶はずとすれば、假令ひ論理若くは政治を能くするも、其人の品性は價値ありといふを得ず、若し品性にして價値なしとせんか、是れ其人の自我の缺損なり、其人其れ自身の疵瑕なり、換言すれば其人の人格の墮落なり、是

れ豈に何人に取りても由々しき大事ならずや、是故に假令ひ論理若くは政治は能くせずとするも、倫理は一日も省みざるを得ざるなり、且つ又論理若くは政治は如何なる人にも之れを期するを得ざれども、倫理の實行は何人にも之れを期せざるを得ざるなり、是れ人てふ人は、人としての價値なかるべからざればなり、凡そ人の取る所の業務は千差萬別ともいふべきほど種々に分れ居るなり、然れども如何なる業務を取るにしても、其人が人たるの品性を具へ居らざる以上は、其業務を忠實に成し遂げやうとは思はれざるなり、是故に倫理の實行は如何なる業務にも先ちて之れなかるべからざるなり、此れに由りて之れを觀れば、倫理學は論理學若くは政治學と同じく規範的科學なりと雖も、亦此れに比して一種特異なる地位を占むること、復た疑なきなり、論理學若くは政治學に比してすら猶ほ且つ然り、況んや心理學若くは社會學に比するをや、

尙ほ又一歩を進めて之れを考察するに、認識と實行との間に劃然分別すべきものあり、是れ他なし、認識は總べて向外的なり、吾人は外に向つて事々物々を分明に辨別するの力を有す、之れを認識となす、若し之れを倒逆して內に向ひ、抑、其の事々物々を辨別する主人公は如何なるものなるかと問ひ、分明に之れを認識せんとせば、到底得る所なし、乃ち認識は向外的のものにして、決して向內的のものならざるを知るべし、是故に單に認識のみによりて立てられたる道德主義は向外的となりて、人を實在的方面より動かすと能はず、吾人一切の道德的動作は其痕迹を現象界に留むと雖も、其本源を尋ぬれば、一として意志に出てざるはなし、即ち意志てふ者は一切の道德的動作を創始する者なり、然るに意志とは何ぞや、意志は吾人の自我なり、意志あれば茲に自我あり、意志なければ復た自我なし、自我即ち意志、意志即ち自我、彼れと此れとを分ちて二者となすこと能はざるなり、然るに意志は靜止せる死物とは違ひ、一種內容の活動Thätigkeitなり、所謂意志活動Willensthätigkeitといふものなり、然るに活動其れ自身は現象を超絕するものなれば、之れを認識する

こと能はず、活動の結果として外界に現はれ來たる動作は認識の對象となるものなれども、動作の本源たる活動其物に至りては、何等の消息をも得ること能はず、是れ動作は現象界に屬し、活動は實在界に屬すればなり、凡そ意志活動の起るは知力によりて欲求の對象を外界に認識すればなり、認識の必要は、如何なる欲求の對象あるかを敎へ、又如何にして之れを享受すべきやを示すにあり、乃ち吾人は認識によりて如何に自ら外界に處すべきやを知ることを得るなり、認識と意志と相待たざれば、道德的動作も成し遂ぐること能はず、意志は全く盲目的なれば、なり、盲目的意志に導かれて、盲目的行動をなす、是れ豈に道德的動作といふべきものならんや、認識は燈火の如し、此燈火を得て意志始めて盲目たらざるを得、是に於てか、正確に其欲求を充たすを得べきなり、然れども認識と意志と相待つのみにては、道德的動作は未だ十分なりといふを得ざるなり、其故いかんといふに、單に認識をのみ頼みとするときは、如何に外界に處するならば、最も己れに利益あるべきやを計畫し、智巧を本としたる便宜法を立てゝ、是れを道德主義とせん、此の如き道德主義によりて己れが動作を律するときは、動もすれば、輙ち便佞智巧の矯飾的行爲となり、若くは又排他利己の狹獪刻薄の行爲となり、崇高優美の道德、地を拂つて無きに至らん、是れ全く心胸の感情を度外視すればなり、人には知と意とのみあるにあらず、又情てふものあるなり、殊に自他を融合調和する同情の如きは、道德上中々に重要の位置を占むるものなり、若し感情を省みざらんか、眞に崇高優美の道德成り立つべき餘地あるなし、唯感情を省み、此れによりて意志を定む、是に於てか崇高優美の道德、始めて成り立つものなり、然るに感情は直覺的のものにして、認識の如く經驗的のものにあらず、種々なる感情は、固より心的現象なりと雖も、感情其れ自身は一種の直接的活動にして、現象を超絶するものといふべし、之れを要するに、意志と感情とは超絶的の本源を有するものなり、認識も超絶的本源を有せざるにあらず、抑認識の出來得べきは、認識をして出來得べからしむる能力、即ち認識活動 Erkenntnissthätigkeit

あるが爲めなり、然るに認識活動は認識にあらず、認識はどこまでも、外界の事物に於ける辨別作用に過ぎざるなり、意志と感情とは之れと異なり、意志活動は矢張意志なり、感情活動は矢張感情なり、活動としての意志も意志に外ならず、活動としての感情も感情に外ならず、此れ吾人の分明に區別して考察すべき點なりとす、之れを要するに、認識は專ら現象界に關し、意志と感情とは何れも結果を現象界に及ぼすと雖も、其本源は實在界にあり、道德上の理論は總べて他の理論と同じく認識によるより外之れなきも、道德の實行は意志と感情とを俟たざれば、其功を奏すること能はず、是故に單に認識のみを頼みとする道德主義は實行上に効力薄からざるを得ず、効力ある道德主義は意志と感情とを併せて省みるものならざるべからず、然るに倫理學は道德主義を攻究し、發見し、建設するものなり、倫理學てふものが專ら理論的なるべきものにして、必ずしも實行的のものなるべからずとせば、心理學若くは社會學と同じく、之れを自然科學として取り扱ふも不可なることなし、然れども倫理學てふものは、論理學若くは政治學と同じく、理論と實行とを合一するものならざるべからざるものなり、果して然らば倫理學は決して心理學若くは社會學と同一に取り扱ふべき學科にあらず、是れ本と現象のみに關する學科にあらざればなり、固より如何に意志及び感情の本源が實在界にありとするも、學として倫理學を攻究するには認識によるより外之なきなり、然れども道德の本源は認識の境界以外にあるを以て單に認識によりて闡明すべからざることを知らざるべからず、而して道德の實行を左右するものは、反りて認識の境界以外にあるなり、認識の闡明する所は唯、現象として表はれ來たる道德的動作のみ、道德的動作の本源に至りては一歩も進入すること能はざるなり、是故に倫理學を心理學若くは社會學の如き現象の學と同一視すること の妄謬を知るべきなり、若し倫理學を哲學より引きはなし、單に現象の學として攻究せば、一箇の理論的の倫理學は必ず成立すべきも、此の如きは人に實行の動機を與ふるの効力なきものなり、

上來辨明せるが如く、倫理學は心理學若くは社會學と同樣に現象の學として取り扱ふべきものにあらず、然るに世の學者往々之れを現象の學と同一視し、自然科學の方法によりて攻究すべきものとせり、自然科學の方法によりて攻究することは、固より一大進歩なりと雖も、自然科學の方法によりて攻究し、道德的事實の說明さへ出來得れば、其れにて倫理學は其職分を完成せるものとするは、決して其當を得たるものにあらず、此事たるや、倫理學が近來いかなる結果を生じつゝあるかにより知るべきなり、知的探究を主とする倫理學は外界の事物を究明し、其成果を基礎として道德主義を確定せんとす、然れども外界の事物に際限あることなし、悉く之れを究明せんこと到底出來得べきことにあらず、是を以て各々其見る所の道德主義を主張し、相排擠して歸一の期あることなし、換言すれば、知的探究によりて相爭ふこと愈々盛なりと雖も、歸する所は千差萬別にして、畢竟一家言あるのみ、是に於てか利己主義といひ、利他主義といひ、快樂主義といひ、克己主義といひ、進化主義といひ、直覺主義といひ、其他種々なる道德主義は起り來たれり、是れを道德の進歩と見るべきかといふに必ずしも然らず、相互に揉着せる道德主義の增加するに隨つて、人其適從する所を知らず、多岐亡羊、迷はざらんと欲するも、亦能はざるの概あり、知的探究の結果として、道德的事實若くは倫理的理論に關する認識の進歩は著しからずとせず、是れ甚だ喜ぶべき事なりと雖も、道德的行爲は、果して認識の進歩に伴つて、進歩せしや否や、是れ吾人の深く考察せざるべからざる點なりとす、吾人は不幸にして認識の進歩に伴へる道德的行爲の進歩を發見することを能はず、若し一般の傾向を言へば、表裏を分別し、表面の事は相互に顧慮して、禮讓を失はざらんことを務むと雖も、裏面は一己の私事なり、他人の干涉すべき所にあらずとして、放縱自肆の範圍を作り、彼れも是れも明光を恐るゝ痕迹を有するが故に、裏面の事に關しては相互に目を閉ち、最も巧に矯飾して社交を親密にするの傾向あるが如し、文明といひ、開化といふと雖も、此の如く表裏の相違甚しきを思はゞ、世の道德が如

何なる程度までに進歩せしか頗る疑はしきものなり、固より社交的の道德にして進歩せしものあるは、疑ふべからずと雖も、世の道德が認識の進歩と共に進歩せしといふことは信ずること能はず、乃ち問はん、道德的事實に關する研究が緻密を加ふると同時にいかほど實行が擧がりしか、又之れを思へ、道德を以て世に顯はれたる偉人は反りて古代に多くして、近世に少きを、倫理學が實行に關係なきものならばいざ知らず、苟も實行に關係あるものならば、此の如き反對の結果を生ずべき謂はれあるなし、此の如き反對の結果を生ずるものは、倫理學者の謬見に本づくにあらずして何ぞや、固より當今の倫理學者が皆謬見に陷れりとはいはず、然れども彼等の或る者が相率ゐて謬見に陷れることは、到底否定するを得ざるなり、

外界の事物を研究し、其成果を基礎として道德主義を建設せんと欲せば、先づ外界の事物を分解せざるべからず、然るに分解は際限あるものにあらず、是を以て分解は最早成し盡くしたりといふべき時期に到達すること能はざるなり、然るに總合にあらざれば、道德主義も建設し得られず、故に已に分解し得たる特殊の事實に就いて歸納的に總合せざるを得ず、然れども未だ一切外界の事物を分解したるにあらざるが故に、其歸納的に總合せるものは、甚だ不完全なるものなり、是を以て出來得べき丈完全を期せざるべからず、出來得べき丈完全を期すれば期するほど、道德主義の建設は、遷延彌久せざるを得ず、若し眞に完全なる總合を俟たんか、此の如き總合を得るの期なきが故に、道德主義の建設は、實際に於ては、望みなしと謂はざるを得ず、然るに道德的行爲は時々刻々、之れを要するなり、研究の結果を俟ちて始めて己れが立脚點を確定せんとせば、其時までは何等の道德もなくして動作云爲すべきか、何ぞ其れ然らん、道德は寸時と雖も、之れなかるべからざるものなり、是故に道德的行爲の動機は知的研究を主とする倫理學によりて得らるべからざるを知るべきなり、ホッフデング氏當今の學風を論じて曰く、「吾人は姑く批評及び分解の時代に生存するものにて、吾人精神的生命の全

躰が此れに由りて鏤刻せられたり、Wir leben vorläufig in dem Zeitalter der Kritik und der Analyse, und unser ganzes geistiges Leben ist hierdurch gestempelt.

と、洵に然り、然れども是れ蓋し過渡の時代にして、尚ほ今後に至りて總合建設を期せざるを得ざるなり、

第三章　宗教家の謬見

今日生命ある宗教の重要なるものを考察するに、婆羅門教と佛教とは印度に起り、猶太教と基督教とはユダヤに起り、拜火教は波斯に起り、回々教はアラビヤに起り、道教と儒教とは支那に起れり、其他種々なる宗教は世界の各地方に起れり、宗教を産出せる世界の各地方は、今日にありては、便利なる交通機關の爲めに次第に接近し、殆んど比鄰の如き思あらざるはなしと雖も、古代にありては、決して然らず、交通機關の不便なるが爲めに彼れと此れとは殆んど別世界の如き狀況をなし、特殊の境遇と特殊の事情とを有せしは、亦必然の結果と謂はざるべからざるなり、然るに今日指を屈して算ふる所の重要なる宗教は皆此等別世界の如き狀況をなせる各地方に起れり、故に特殊の境遇により特殊の事情に從つて發達し、一として其特殊性を有せざるはなし、即ち歷史的宗教として理想的宗教と峻別すべきものなり、是等特殊の歷史的宗教が

各其の特殊性を有するは、是れ當然の事にて、若し何等の特殊性をも有せざりしならば、是れ反りて怪むべき事ならん、然るに是等歴史的宗教は今日にありては、未だ曾て有らざるの一大變動に遭遇せんとしつゝあるなり、何ぞや、交通機關の便利あるが爲めに、世界の廣きも、一家の如く同族の如き感あり、斯時に當りて尚ほ歴史的宗教の特殊性を維持するの必要は最早之れなきなり、特殊の宗教を產出したる特殊の境遇と特殊の事情とは、世界的交通の發展と共に消滅の途に就き、各地方の人類は同一の境遇と同一の事情に投ぜらるゝ事となれり、換言すれば、世界的潮流は彼此の別を沒し、一切の人類を卷いて進むの看あるに至れり、事已に此の如くなる以上は、歴史的宗教が此趨勢と共に一大變動を免れざるべきは辯を俟たずして知るべきなり、

歴史的宗教は特殊の民族の精神的需用に應じて起れる者なり、故に其特殊性は、特殊の民族に必要なる元素なるべけれども、此の如き特殊性を除いて人類一般に普遍なるものあるなり、古代にありては特殊の歴史的宗教にて足れりとするも、今日にありては、人類一般に普遍なるものを要するなり、然るに世の宗教家は、尚ほ此新傾向を曉らず、歴史的宗教の特殊性に拘泥し、各己れが信奉する宗教を以て唯一の眞宗教となし、自餘一切の宗教を僞宗教となし、排擠降辱、至らざるはなし、即ち基督教の宣教師は思へらく、世界に於て獨り基督教のみ眞正なりと、然れども佛教徒にせよ、婆羅門教徒にせよ、己れが信奉する宗教を以て唯一の眞宗教とするの一點に至りて、何の差異か之れあらん、元來特殊の宗教を信奉するは、之れを自餘一切の宗教に比して優れりと思惟するが爲めなり、宗教上の偏見は、全く歴史的宗教の特殊性に執着するより起る、此の如き宗教上の偏見を打破するにあらざれば、宗教の眞相は明かならざるなり、特殊の歴史的宗教は特殊の顯現なり、委しく之れを言へば、宗教の本體の全部にあらずして、其或る方面の顯現なり、宗教は人類文運の進歩と共に發展し、次第に多大なる本體を顯現すべきも、或る時代に於ては、其或る方面が或る地方に顯現せられたり、是れを歴史的宗教

と、なす、歴史的宗教に共通の點あり、又相違の點あり、共通の點は宗教の本體の顯現なり、相違の點は宗教の特殊性なり、宗教の特殊性は一日も早く打破すべきものなり、之れを打破するに隨つて宗教の本體愈顯現するに至らん、宗教の本體愈顯現するに至らば、人類一般の宗教、始めて成立するを得ん、

宗教上の偏見は共通の害惡にして、百般の騷亂、此れより起れり、即ち十字軍の如き、回々教徒の侵略の如き、三十年戰爭の如き、勝げて數ふべからず、近くは北清事件の如き、亦其本を言へば、宗教上の偏見に淵源せり、基督教の宣教師思へらく、支那の宗教は僞宗教なり、之れに換ふるに基督教を以てせんと、乃ち支那人に強ふるに基督教を以てせり、支那人は思へらく、我邦本と孔孟の教あり、何ぞ基督教を取らんと、乃ち之れを排斥せり、此相互の感情の軋轢は遂に爆裂して義和團の騷亂となり、遂に北清事件を惹起せり、若し宗教上の偏見を離れて局外より儒教と基督教とを比較考察せば、其形式に於ては相容るべからざるものありとす、

るも、其精神に於ては反りて契合する所あるなり、例へば、(一)基督教は唯一の「ゴッド」を尊信し、是れを眞神となす、然れども儒教も古來上帝を崇奉し、道の本源、此に存すとせり、基督教の「ゴッド」と儒教の上帝と其名稱は異なり、然れども其觀念に於て如何なる異同ありや、假令ひ多少の異同ありとするも、畢竟同一の實在概念の顯現なりと見るを得べし、(二)基督教は愛を以て人道の主義となし、愛に於て「ゴッド」の影像を認む、然るに儒教は之れと何等の差ありや、儒教は仁を以て人道の主義となし、仁は天の人に付與する所となす、即ち上帝の降りて人にあるものなり、然るに仁は愛に外ならず、仁と愛と其名稱は同じからずと雖も、事實に於ては異なる所なし、(三)基督教は天國胸にありとし、安心立命の地を方寸の中に發見せり、然るに儒教も之れと同じく一切道德の根柢を以て方寸の中にありとし、百般人事に處するの道、此れより說き出だし來らずといふことなし、其他尙ほ彼れと此れと一致する所少しとせざるなり、若し能く是等の事實を了解せば、何等の騷亂をも惹起せざるべきも、宣教

師も支那人も共に偏見に惑はされ自ら不測の禍を招きつゝあるなり、俗に所謂飛んで火に入る夏の蟲とは是等の徒をこそいふべけれ、宣教師が偏見を懷き居る間は、假令ひ頗る儒教に通じ、其中基督教に類似するものあるを見るも、尙ほ兩者の上に超脫して公平の見を執ること能はず、どこまでも己れが宗教を以て世界に於ける唯一の眞宗教となし、我田引水の曲論をなして已まず、凡そ宗教上の偏見の惰性は甚だ強大なるものにて中々容易の事にては打破し得られざるものなり、

然れども北清事件は、宗教の偏見を打破するに大に効力ありしが如し、或は是れ實に世界に盤屈せる一切宗教上の偏見を打破する曙光なんか、其故いかん、(一)日本人は非基督教徒なり、然るに基督教國の兵と合して支那の義和團を討伐せり、(二)日本人は支那人と同一人種なり、然るに反りて白人たる西洋人と聯合して死生を共にせり、是を以て日本人は世界の名教上に意外の影響を及ぼせり、即ち日本人は宗教の異同と人種の異同とに拘はらず、凡そ是等の差別見を超絶せるものなるとを事實によりて明ぜり、若し今後尙ほ將に來らんとする事變あらんか、愈〻宗教上の偏見を打破し、從ひて又人種上の偏見をも一掃するを得ん、

人種上の偏見は往々宗教上の偏見に伴ふものなり、人種は全く異なりとするも、宗教にして同一ならば、相互の感情自ら融和し易かるべきも、宗教にして全く異ならば、基督教國の人は必ず思はん、彼れは異教徒なり、即ち「ペーガン」なり「ヒーゼン」なりと、且つ從來道德と基督教とを固く連想し來れるが故に非基督教徒と不善者とを同一視し、總べて非基督教徒を甚しく輕蔑するの傾向あり、故に彼等が異教徒と交戰し、其勝を制するに當りて、殆んど戰敗者を人類と見做さず、筆舌を以て盡くし難き程の殘虐を加ふる事あり、北清事件がいかなる悲慘の報道をもたらしたるか、是れには固より他の原因もあるに相違なしと雖も、敵は異教徒なりといふこと確に其一原因なるが如し、殊に或る歐洲の國王の如きは軍隊を支那に派遣するに當りて殆んど今十字軍を起すの氣勢を示し、「清兵には寸毫も慈仁を加へず、一人も之れを捕虜とすることなか

れと勸告せり、其の基督教の主義に戻れるは言ふまでもなく、抑、又世界的人道に反する所爲といふべし、此の如き精神を以て派遣せられたる軍隊が基督教的の舉動あるべき謂はれなし、社會黨員が議會に於て大に義憤を洩したるもの、亦以なきにあらざるなり、是等眼前に演ぜられたる慘劇によりて宗教上の偏見がいかに恐ろしき反人道的の害惡を生じ得べきかを知るに足らん〻

尙ほ又之れを考察するに、北清事件に於て日本人が或る二三の基督教國の兵に比して迥に人道的なりしといふことは、宗教上の偏見を打破するに一層大なる効力ありしならん、基督教國の人は基督教徒と善者とを連想し、また非基督教徒と不善者とを連想するの習慣を有せしも、此習慣は之れが爲めに動搖せられざるを得ず、善者は基督教徒に限らず、不善者は非基督教徒に限らざること、眼前の事實によりて明瞭なれば、なり、非基督教國にありても、古來高潔なる賢人君子張出せり、釋迦孔子の如きは、言ふまでもなく、我邦にありても、菅公楠公を始めとし、人格の秀絕せる人、算へ來たれば、多からずとせず、西洋にありても基督教の未だ傳播せざるに當りて幾多の賢人君子希臘に起れり、ソクラーテス プラトン アリストテレスの如き是れなり、乃ち知るべし、基督教にあらざれば、人の性格を善くすること能はずと思惟するもの、全く宗教上の偏見に本づくを、兎に角北清事件は宗教上の見解に一轉機を與へたること、復た疑なきなり、

或は思へらく、世界各國の狀況を瞥見するに、基督教國は繁榮し、非基督教國は衰退せり、是れ基督教の然からしむ所なりと、各國の興亡盛衰の原因の何たるかを史的事實によりて論證することは姑く之れを置き、唯一の顯著なる除外例を擧ぐるを得、是れ他なし、我日本國なり、今や日本は非基督教にして起り、一躍して世界の强國に列せり、此の如き一の顯著なる除外例は、彼れが如き宗教上の偏見を打破するに足る、何れにせよ、日本は今後の宗教に一大變動を來たすべき天職を有するものに似たり、因りて又之れを考察するに、世界の重要なる諸宗教は我邦に輻

湊せり、佛教といひ、儒教といひ、基督教といひ、皆雜然として交叉せり、唯一の宗教の民心を支配せざりしことは、我邦に取りて非常なる幸なりき、唯一の宗教の信仰は偏見を頑固にし、遂に容易に之れを脱却することは能はざらしむ、基督教の宣教師が偏見を抱き、頑冥固陋なるは、蓋し此れが爲めなり、我邦は種々の宗教を有せしゆゑ、比較的に自由思想を存し、唯一の宗教に凝結し了はるが如き弊なかりき、近來基督教の渡來せるも、亦好結果なしとせず、我邦の思想界を活潑にし、又之れを豐富にせり、加之、宗教の數を增加し、信教自由の範圍を擴充せること亦著しとなす、此の如く種々なる宗教、現に我邦に行はると雖も、本と宗教の本躰に於て異同あるにあらず、但其特殊性の相容れざるものありて、未だ合一せざるのみ、若し其特殊性を打破せば、宗教上の偏見全く除去せられて、悉く相合一し、圓融無礙の境界を現出するを得ん、此の如き建設的事業を圖るべき自然の任務は、我邦人の雙肩に懸るにあらざるか、我邦人は宗教に對して最も公平なる態度を取ることを得るの點より之れを言へば、此事たる、疑を容るべからざるに似たり、世界の諸宗教を比較考察するに、各長處あり、又短處あり、唯一の宗教を擧げて是れを完全なる宗教とするを得ず、固より其宗教を尊信するものは、己れが宗教を以て完全なりとすべけれども、是れ全く我田引水の見解にて公平なるものにあらず、局外者より之を見れば、如何なる歴史的宗教も完全なりといふを得ず、進歩せる認識を有せるものは、唯一の歴史的宗教を以て己れが精神的需用を充たすこと能はざるもの、此れが爲めに外ならず、此れを之れ察せずして、尙ほ歴史的宗教の特殊性を維持せんとするもの、其愚や眞に及ぶべからずといふべきなり、

歴史的宗教が實際いかなる價値を有するものなるかを考察せば、其意外に低減せるを發見せん、今日の教育ある者の多數は寺院にも行かず、又會堂にも通はず、是れ何等の意味もなき儀式に拘はり、陳腐なる古禮に山ることの餘りに進歩せる智識と撞着すればなり、宗教家は或は多數の無宗教なるを笑ふべけれども、決して笑ふべき理由あるにあらず、

歴史的の宗教は最早進歩せる智識あるものに生きたる信仰を付與するの効力なければなり、故に無宗教者が宗教家を笑ふと反りて道理ありといふべきなり、要するに、今の教育ある者の多數は歴史的宗教の必要を感ぜず、故に別に寺院に行き、若くは會堂に通ひ、之れを求むることを試みざるなり、之れを譬ふれば、猶ほ兒子の漸く生長して母乳の必要を感ぜざるがごとし、彼等をして再び舊時の情態に復へらしめんとせば、自然の進歩に反せざるを得ざるなり、寺院若くは會堂に出入し、古風の信仰を守るものは、比較的に進歩に後れたるもの、又は老人女子に多し、此れに由りて歴史的宗教が如何なる智識の程度に必要なるかを知るべし、げに歴史的宗教は螢の如く智識の光明と逆比例をなすといふべきなり、然るに今の智識の開發は科學的根柢を有し、永遠進んで已まざる世界の大趨勢なるが故に再び逆行して智識の混沌に歸するが如きは、到底夢想すること能はざる所なり、此の如くなれば、歴史的宗教は歳に月に智識の發展に伴ひ、迹を收め影を潜めざるべからず、而して其徴候の顯著なる、何人も之れを認容せざらんと欲するも能はざるべきなり、歴史的宗教の衰退は獨り我邦に於てのみ然るにあらず、世界各國、然らずといふことなし、此の如く歴史的宗教が勢力を失ひ、一般に萎微の狀を呈せしもの中々に意味あることなり、歴史的宗教は何れも其の特殊性を脱却し、變形し、合一し、發展して一の實行主義とならんとするものなり、殊に近時に及び世界的交通は愈親密となり、殆んど豫想以外に出でんとす、此の如き急調の變動、起り來たれる以上は、宗教も亦之れに伴ふて一大變動なかるべからず、乃ち特殊の宗教の代はりに、人類一般に共通なる宗教の起らんこと、豈に期して俟つべからずとせんや、歴史的の宗教は皆特殊性あること已に之れを詳悉せり、然るに特殊性といふは獨り特殊の境遇、特殊の時勢にのみ適應せるものにて、廣き世界の人類に適應せざることなり、例へば、佛教にて六道輪廻を說き、肉食妻帶を禁ずるが如き、毫も其必要を見ざるなり、又基督教にて三位一躰を說き、血肉化躰を說くが如き、又何の必要かある、總べて是等の事は人

類一般に必要ならざる事にて、又今日の學理にも合はざる事なり然るに宗教の惰性非常に強きが爲めに是等不合理の事までも頑固に維持せらる、是れを歴史的宗教の特殊性となす、宗教上の偏見は全く此に根柢するものなり、然るに歴史的宗教の教として傳ふる所のものに、人類一般に適應するものあり、例へば、佛教の實在の觀念の如き、基督教の人道の教旨の如き、何れの處に應用してか不可ならん、是等は宗教の特殊性にあらず、宗教の顯現の一樣ならざるに出づるなり、宗教の全躰が一時に顯現せられたるにあらずして、宗教の或る部分が各處に顯現せられたるなり、是故に顯現の事實は同一なるも、其方法に異同あるなり、佛教の長處は獨り佛教徒の私すべきものにあらず、人類一般の共有物なり、基督教の長處は獨り基督教徒の私すべきものにあらず、廣き世界の公共物なり、其他如何なる宗教の長處も亦然らずといふことなし、若し我れは佛教徒なるが故に基督教に取ることを欲せずといはゞ、誰れか其愚を笑はざらん、若し我れは基督教徒なるが故に佛教に顧みるを要せずといはゞ、癡も亦甚しからずや、有益なる教訓は古聖賢の人類一般に與へたる遺産なり、獨り其自稱宗徒の私すべきものにあらざるなり、若し此の如き光明正大なる觀念を以て進み行かば、最も進歩せる人類の中には必ず實行の主義たる公共の宗教を生じ、復た歴史的宗教の頑冥固陋を蹈襲し、宗教上の偏見に誤まらるゝが如き愚をなさゞるべきなり、

歴史的の宗教は最早必要なきなり、其特殊性は今日の科學と衝突し、智識と相容れず、其特殊性を打破し了はれば、歴史的宗教は其れと同時に消滅し、之れに代はりて人類一般の宗教起るべきなり、歴史的宗教と人類一般の宗教と其差甚しく、殆んど同一の範疇に入るべきものなりや否やを疑はしむる程なり、歴史的宗教は必要なしとするも、人類一般の宗教はなかるべからざるなり、之れを宗教といふこと或は當らず然れども別に適當の名稱を發見せず、故に姑く宗教の名稱を假用するのみ、唯歴史的宗教に代はりて起るべきものと解せば可ならん、然らざれば、

又之れを道徳といふを得べし、いかに宗教に冷淡なる人と雖も、道徳なきこと能はず、否、道徳は片時と雖も、之れを廢すること能はず、然るに道徳の効力あるものは、歴史的宗教と同一の根柢を有するものなり、然れども歴史的宗教の特殊性は最早吾人に必要なきが故に、之れを取り除いて宗教的道徳を建設せざるべからざるなり、是れを人類一般の宗教となす、是れを理想的宗教 Idealreligion と云ふ、宗教の將來いかんは此の如く分明に眼前に映寫し來たれり、唯一轉機を俟つのみ、此の如くなれば吾人は一日も早く宗教上の偏見を打破し、混沌を開拓するの決心なかるべからざるなり、

第四章　倫理の根柢

倫理の根柢の何たるかを論ずるに當りて先づ人生の三大事件を論ぜん、人生遭遇する所の事件、實に千萬無量といふべきも、其最も重大なるもの、概括して之れを言へば、畢竟三大事件に過ぎず、何ぞや、曰く、認識、曰く、快樂、曰く、道徳、是れなり、試に之れを日常の情態に徵せよ、如何なる人の動作云爲も、此三者の爲めにあらずといふことなし、人類は一切他の動物と同じく快不快の感に支配せられて、發展進暢するものにて、之れを脱せんとするも、生命のあらん限りは能はず、快感は即ち生命の發展を指示し、不快感は即ち生命の衰退を指示す、例へば、勞働を繼續するときは、漸く倦厭を來たす、尚ほ繼續して止まざるときは、疲羸甚だしく、不快の感を生ず、是れ生命の傷はれつゝあるを意味す、此時に當りて休息すれば、快感を生ず、是れ生命の養はれ又は補はれつゝあるを意味す、久しく密室内にあるものゝ戸外に出て快感を覺ゆるが如き、長く坐して

苦心せる者の山野に遊んで快感を覺ゆるが如き、皆其生命に裨益あるを意味す、夫の治療の苦痛の如きは小不快によりて大不快を除くの手段に過ぎざるのみ、要するに、快不快の感は人類を支配する自然の大勢力なり、然れども人類は單に快不快の感のみによりて進むこと能はず、若し單に快不快の感のみによりて進まば、快感を期しながら反りて不快を來たすが如き、意外の結果もあるべく、今得つゝある快感も忽ち斷え、再び得べからざることもあるべく、今感ぜざる不快も幾もなく來たることあるべく、同じく快感といふ中にも、強弱高下の異同もあるべきが故に、外界の事物に於て委しく之れを識別せざるべからず、是れ認識の要ある所以なり、認識は吾人に吾人の取るべき方法を示教するものなり、一切の科學の如きは、皆人類の獲得せる組織的の認識なり、然るに如何なる科學と雖も人類の快感を增進し、不快感を減殺する所以にあらざるはなし、快樂と認識との關係、此れによりて知るべきなり、然れども人生の事件は快樂と認識との兩者に盡きたりといふを得ず、何故なれば、人類は箇々別々に生存せるにあらず、數多のもの相集まり相結んで社會といふ有機的團體を組織せり、是を以て我認識を賴み、我一身の快樂を求むといふことのみにては、人生の旨趣未だ盡きたりといふを得ざるなり、社會と我れとは別なりと雖も、亦分つべからざる關係あり、分つべからざる關係ありと雖も、亦混ずべからず、是に於てか社會と我れとの間に道德といふものありて起る、道德なければ、我れも社會も成立せず、唯道德あるによりて我れも社會も成立するを得、道德が人類に取りて如何に重大のものなるかは此れに由りて知るべきなり、果して然らば認識と快樂と道德と、此三者は初め言ひし如く人生に關する最も重要なる三大事件なること、復た疑なきなり、

道德に關する理論は、固より認識によりて之れを確定すべきも、道德と認識とは、本と其範圍を異にするを以て、決して兩者を混同すべきにあらず、道德の認識さへ出來得れば、道德其物も亦出來得べしとするは甚しき謬見なり、道德上のことは獨り認識のみによりて確定し得らるゝ

ものにあらず、畢竟道德に關する認識と道德其物とは二種の事件なり、之れを同一視するは差別を知らざる者の盲のみ、道德に關する認識は唯認識のみ、實行にあらず、實行は內界の活動に起因するものにて認識にあらず、是れ甚だ見やすき事實ならずや、抑〻道德的動作は現象として外界に痕迹を留むと雖も、單に之れを外界に起るものとするは、皮相の見なり、一切の道德的動作は意志の結果なり、內に先づ意志の起るあり、然して後、發して動作となる、動作は抑〻其末にして、意志實に之れが本たり、是故に一切の道德的動作の本源は、人の頭腦中にあり、即ち內界の幽邃なる處にあり、若し夫れ意志活動其物に至りては、認識を超絕す、即ち、認識の範圍は道德の範圍を蔽ふこと能はざるを知るべきなり、然れども斯く言ふのみにては、未だ道德其物の眞相を盡くせりといふを得ず、道德的動作の本は意志なるに相違なきも、不道德的動作の本も亦意志なり、如何なる罪惡を犯すにしても先づ之れを犯さんとの意志ありて後之れを決行せざるはなし、是故に意志の結果とさへいへば、必ずしも道德的なりと思惟すべきにあらず、意志は善惡の何れを成遂するにも均しく之れあればなり、道德的動作の本たるべき意志は感情（同情の如き高尚なる感情、以下之に倣へ）即ち心的感情と相伴ふ者ならざるべからず、感情と意志と相一致し、相調和して始めて道德的動作の結果を生じ得べきなり、尙ほ推して之れを考ふれば、認識も亦道德的動作を遂行するに必然なる狀件なり、認識なければ、曾に如何に外界に處すべきかを知らざるのみならず、抑〻又道德的動作の一切不道德的動作に優ることをも知るを得ざるべきなり、之れを要するに、智情意の結合一致は、如何なる道德的動作を遂行するにも、なかるべからざる所なり、故に單に認識を有するのみにては、未だ之れを道德的動作といふを得ず、又單に感情を有するのみにては、未だ之れを道德的動作といふを得ず、道德的動作は實現なり、活動なり、外界に及ぼす結果なり、認識と感情とは未だ道德的動作を遂行することと能はず、道德的動作を遂行せんには必ず意志發動を俟たざるべからず、意志は內界より起り來たる活動なり、此の如き活動の起り來

たるに及んで道德的動作は始めて成遂せらるゝなり是故に道德的動作を遂行するには必ず智情意の結合一致を要すといへども意志は三者の中最も主要なるものなり假令ひ道德的動作の方法が如何に明晰に認識によりて示さるゝも又道德的動作の必要が如何に鋭敏に感情によりて感ぜらるゝも之れを決行すると然らざるとは全く意志其物に關す即ち意志が道德的動作の本源なるものなること推して知るべきなり

種々なる欲求の對象は外界にあり各個人の意志は是等外界の對象に向つて發動し其欲求を充足せんとす日常百般の動作云爲は之れが爲めに起るなり然るに茲に注意せよ各個人の意志は外界の對象により て規定せらるゝか將た又各個人の意志が欲求の對象を規定するかいかん意志は欲求の對象を外界に得るより外之れなきが故に外界の對象が或る程度までは意志を規定すること疑ふべからずと雖も意志は決して受感的のものにあらず意志自ら欲求の對象を選擇するものなり種々なる外界の對象中に就いて道德に叶へるものを欲求するか道德に叶はざるものを欲求するか是れ全く意志其物に屬す換言すれば欲求の對象が一定せるにあらず如何なるものを欲求の對象とするかは意志其物によりて確定す是故に外界の對象が意志を規定すといふは意志が必然的に外界の對象によりて規定せらるゝにあらず外界の對象は唯意志の欲求し得べき材料を供給し範圍を限畫するに過ぎざるのみ其材料に就き其範圍に於て如何なる對象を選擇するかの自由は意志其物にあり是故に欲求の對象は意志によりて規定せらるゝこと疑なきなり意志は即ち道德的動作の主人公ともいふべきものなり然るに意志活動は我れに於ける根本的活動にして又我品性を顯現し我れの我れたる所以を確定するものなるが故に是れ取も直さず我れなり一切の道德的動作は外界より必然的に之れを確定するものあるなくして我れ自ら自由に之れを確定するものなり是故に我動作云爲の結果いかんは皆我れ自ら惹起せる所にして道德的責任は我れ自ら

負はるを得ざるなり、

然れども抑我れの我れたるを自覺するは何によりて然るか、是れ意識あるが爲めなり、意識は先天的統一的能力を有するものにて、決して靜止的のものにあらず、然れども內外の變動を映寫するの狀は、明鏡に比すべからずとせず、各個人の日常經驗する所は、悉く意識に映寫し來たるものにて、猶ほ物象の明鏡に映寫するがごとし、吾人が如何なる對象を欲求し、如何なる手段に出でんとするかは、假令ひ他人之れを窺ひ知るを得ずとするも、吾人自らは悉く之れを意識中に於て知るを得るなり、又已に決行したる事蹟にして、姑く蔽はるゝことありとするも、吾人自らは之れを己れが意識中に蔽ふこと能はざるなり、是を以て如何なる人格を實現するかは我れ自ら我意識中に於て確定するより外なきなり、自ら我意識中に省みて毫も恥づることなきほど淨潔なる人格を有する以上は其結果は豫め知るべきなり、一切の道德的動作は痕迹を外界に留むと雖も、頭腦中に淵源せざるはなし、換言すれは、意識中の意志發動に起因せざるはなし、是故に單に外部より社會的制裁により人をして道德的ならしめんとするも能はず、社會的制裁にして強大なる力を有するを得ば、兎に角表面だけは道德的なることもあらん、然れども公衆相互の見聞の及ばざる處に於ては如何なる罪惡も行はれずといふことなし、然かれども若し意識中の意志發動より道德的なるを得ば、一切の動作云爲は自ら道德的となること疑なしかゝる場合にありては我れを律するものは、我れ自身なるが故に他人の見聞いかんに拘はらず、獨在の時にありても、暗黑面にありても、如何なる處にありても、已れが一切の動作云爲をして道德的ならしむるを得るなり、故に道德の大本は意志の自律 Autonomie des Willens にありといふべし、道德の實行に關しては、他律は決して十分の効力なし、唯自律のみ十分の効力を有し得べきなり、智識の未だ發達せざる者には他律的の道德にて十分の効力あることもあり、然れども智識の已に發達せるものは多少の批評的精神を有するが故に、最早盲目的に他律的の道德を來すること能

はず必ず知欲を充たすべき合理的の道德を要するものなり、故に道德の實行を期せんには、自律的の道德より適切なるはなし、自律的の道德は知欲を充すべき唯一の合理的道德なりといふも不可なきものなり、」上來論述する所によりて明瞭なるが如く、道德の實行は之れを意志の自律に本づくるより外なし、然るに意志の自律といふは意識を伴ふ意志が自らを規定することとなり、意志活動は認識の如く經驗によりて獲得せしものにあらずして、一種の能力として先天的に吾人に存するものなり、之れを修養訓練するは、經驗によるべしと雖も、意志活動其物は原本的のものにして、之れを天與といふも不可なきなり、道德は畢竟品性を高尚にし、人格を完成するにあり、然るに人格を完成することは、意志の自律によりて始めて期すべし、意志が人格を完成せんとせば、完成するを得べく、然らざれば、然らず、總べて意志のいかんに關することなり、人格を完成せんには感情及び認識を離るゝこと能はず、意志は盲目的活動なるが故に認識によりて導かれざるべからず、然れども又感情と合一せざるべからず、若し感情いかんを顧みず、單に認識のみによりて導かるゝことならば不快感を避けて、快感を取り、一己の欲求を充足すといふことより外之れなかるべきなり、一己の欲求が同類の關係を離れて單獨に充足し得らるゝものならば、快樂を以て人生唯一の目的とするも、亦不可なることなかるべきも、奈何せん、一己の欲求は直接なり間接なり、同類の關係を離れて充足し得らるゝものにあらざるを、同類は何れも己れと同じく不快感を避けて、快感を取り、其欲求を充足せんとしつゝあるなり、然るに欲求の對象は無際限にあらざるが故に、何人も無際限に其欲求を充足する事能はず、必ず或る程度の制限を免れざるなり、此の如き制限は同類相互の關係あるが爲めに起るなり、換言すれば、個人が同類に對する關係上より起るなり、所謂權利は各個人活動の範圍を意味するものにて、又所謂正義は之れを認容し、之れを侵害せざることを意味す、ヘーゲル氏が「權利命令は其根本的規定によれば唯禁戒のみ」das Rechtsgebot ist seiner grundbestimmung nach nur Verbot とい

へるも、之れを意味するものなり、蓋し同類相互の關係を離れては、權利も正義も何等の意味を有せざるものとなる、凡そ道德てふものは同類相互の關係に起因するものなること忘るべからざるなり、若し意志が單に認識によりて導かるゝのみならば、即ち感情いかんを顧みざるならば、發して動作となるもの、悉く利己的にして、道德的となること能はず、是故に同類に對する感情即ち同情を外にして人格を完成せんこと思ひも寄らざるなり、人格は同類中に於ける個人としての品性なり、同類を離れては人格も意味なし、故に獨り認識のみによりて人格を完成せんこと出來得べきことにあらず、若し獨り認識のみを賴んで己れが動作を導かば、感情は必ず反抗し來たらん、智情の衝突は己れが頭腦中に於ける不和なり、即ち自家撞着なり、圓滿なる發展を期せんには智情の一致を要す、然れども決行は意志にあり、是故に意志感情認識の三者、相合して作用をなすにあらざれば品性を高尚にし、人格を完成すること能はず、但、意志感情認識の三者、各〻其官能を異にす、認識は意志に其取るべき方法を示し、感情は意志に同類に對する態度を示し、意志は認識と感情との示す所を決行するものなり、道德的動作は、意志感情認識の三者の一致を要すること前述の如し、然れども動作をして道德的ならしむるものは、感情にして、動作の決行は全く意志に存すること、疑なきなり、

道德に消極と積極との二方面あること、是れ學者の切に注意すべき所なり、吾人々類は相集まり相合して社會を組織し、有機的團體を成せるが故に、己れ一身の欲求を充足せんとするも、出來得べきことにあらず、必ず同類相互に欲求の範圍即ち權利を認容して、始めて一般に平等に或る程度まで欲求を充足し得べきなり、故に己れが欲求の範圍は己れが生存の範圍なり、己れに取りてはこれより重大なるはなし、若し他人己れが欲求の範圍を侵害し來たらば、其不幸も亦從つて甚しからざるを得ず、是を以て他人をして己れが欲求の範圍を侵害せしめざる點に於ては百方手段を盡くさゝるべからず、然れども之れと同時に他人の

欲求の範圍を侵害すべからずとの交互的關係を生ずるは、必然の結果なりといふべし、換言すれば、己れが欲求の範圍を保護するの權利ある代りに他人の欲求の範圍を侵害すべからざるの義務あり、權利と義務とは同類相互の關係上より起るものなり、然るに權利と義務とは法律上にありては正確に之れを規定すと雖も、道德上にありては、正確に之れを規定すること能はず、道德上の權利義務は單に同類相互の認容に止まる、故に多少の僭越若しくは怠慢等の行爲ありとするも、之れを法律に訴ふること能はず、是故に法律上の責罰は其身に及ばず、然れども同類の感情は之れが爲めに傷はれ居るが故に、道德上の責任は、到底免るゝこと能はず、道德上にありては、權利義務は抑〻末なり、感情即ち同情を以て本となす、嚴密に之れを言へば、權利義務は、法律上の權限なり、道德上にありては、法律上の權限を越えて、更に感情いかんを問はざるを得ず、是を以て謙退辭讓等の如き感情上優美なる消極的道德は起れり、古來聖賢の教訓の如きは、消極的道德を說くもの多きが如し、例へは、佛教の十戒の如き、基督教の十戒の如き、皆勿れ勿れと消極的に教へ示せり、此の如き消極的道德は、如何なる人に取りても之れを實行するの要なきはなし、然れども殊に人權を重んぜざる時代に於ては之れを說くの必要ありしならん、今日にありては唯〻消極的道德を實行するのみにては未だ全しといふべからず、一切の邪惡を打ち拂ひ、淨潔無垢の心境を有し、屋漏に愧ぢず、內省疚しからざる品性を涵養し得たりとするも、是れ尙ほ消極的道德に過ぎず、即ち印度の「サンニァシン」Sannyasin の山中獨善と、何を以て異なりとせん、吾人々類は消極的道德の外尙ほ積極的道德を要するものなり、己れが欲求の範圍を自覺し、己れが品性を涵養し得たる以上は、永遠に自由發展を要するなり、自由發展は自我の進化なり、實現なり、展開なり、活動なり、消極的道德によりて己れが正しき範圍を自覺したる以上は、何者をか恐れん、唯〻社會の福祉を增進すといふ目的に向つて猛進するの一事あるのみ、勇氣は正しき範圍と正しき目的とを知るによりて生ず、此の如き勇氣は眞勇なり、暴力若くは蕃勇

の類にあらず、一切の邪惡を擊摧し得べき勇氣なり、假令ひ邪惡起りて一時進路を遮るとするも、邪惡は壞亂して秩序を成さず、正善は之れに反し、必ず秩序をなし、整々堂々、發展して已まず、永遠に影響する所あるものなり、自我は經驗的に之れを言へば、其發展する毎に發展せるものを實現す、即ち業を成し功を立て、社會に發展せる自我は、其未だ然らざりし時の自我に比して一段進歩せる自我を實現す、自我は此の如くにして永遠に自由發展をなし得べきものなり、（委しくは第七章に叙述せり、）社會に於ける自我の自由發展を期するもの、是れを積極的道德となす、然れども自由發展をなさんと欲せば、發展して益優美なるべき種子なかるべからず、此の如き種子は消極的道德によりて養成せらるべきものなり、故に順序上より之れを言へば、消極的道德を以て先きとなす、然れども積極的道德を俟たざれば、消極的道德により養成し得たる種子も、遂に長大して得漢を靡するの大材となること能はざるなり、是故に消極的道德と積極的道德とは鳥の雙翼、車の兩輪の如く、必ず併立すべく、決して偏

廢すべからざるを知るべきなり、

第五章　宗教の根柢

吾人の身體を繞りて森羅萬象あり、是れを現象といふ、現象は認識の對象なり、吾人は何物を認識するかといへば、即ち現象を認識するなり、現象を外にして復た認識し得べきものあるなし、然れども世界は獨り現象のみにあらずして又實在なり、換言すれば、現象と實在との兩方面を有するものなり、（異軒論文二集に收載せる「認識と實在との關係」に詳悉せり、）然るに何人も認識により世界百般の事を理解し、此れによりて身を處するの法を知らざるはなし、認識は此の如く身を處するに最も貴重なる道具なり、器械なり、又燈明なり、然れども認識は單に世界の一方面即ち差別相を寫象せしむるに止まる、故に若し差別相に執着せば奇異なる感を生ぜん、例へば、身邊に落在せる無數の物件は各別躰を成せるに、如何にして相互の關係を有し得べきか、吾人と物件とは啻に相離隔するのみならず、又其性質を異にせるに、吾人は如何にして物件を認識し得べきか、空間時間てふものは何なるか、殊に空間時間の無限は如何に解釋すべきか、死生はいかん、意識ある個人が生々死々して新陳代謝するもの、如何なる印象を與ふるか、何人も生命を以て平生とすれども、其實全く暫有的にして、石火電光も啻ならず、人生五十といふ勿れ、死生は日々にあり、睡醒は即ち死生なり、死生は刻々にあり、呼吸は即ち死生なり、吾人は生命あるを自覺すれども、現實は果して確實なりや否や、吾人は時間の中に生存するに、過去は永遠に去りて還らず、故に非現實なり、未來は未だ實現せられず、故に非現實なり、獨り現實といふべきは現在なり、現在は刹那刹那の時點にして流れて已まず、矢の弦を離るゝが如く、白駒の隙をかけるが如く、淡水の駛するが如く、遂に瞬間だも安住の機會を發見すること能はず、金剛經に

一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、

といふもの、洵に當れり、之れを要するに差別相に拘泥するときは、世界及び人生に就いて奇異の感を生ぜん、奇異の感は即ち不安の感にして、

嚴肅なる思想ある者は之れが平和を得るにあらざれば已むこと能はず、是を以て知的探究によりて之れが解決を求むるものあり、是れを哲學者とす、生きたる信仰によりて胸中の平和を求むるものあり、是れを宗教家とす、哲學も宗教も、奇異なる感あるによりて起る、然るに其奇異なる感は、差別相を超絶せる實在あるによりて起るなり、差別と平等とを合一し、現象と實在とを併有するを得ば、不安の感は痕迹だもなくして、炎々たる生命の源泉を方寸の中に涵養するを得べきなり、

各宗教の史的發達の如きは、姑く之れを置き、現在存する所の各宗教の根柢は果して何なりや、思ふに實在にあらざるはなきなり、佛教の如來、基督教の「ゴッド」、儒教の天の如き、皆實在の觀念なり、其他如何なる宗教と雖も、實在の觀念を以て其根柢とせざるものなし、若し佛教より如來、基督教より「ゴッド」、儒教より天を除き去らば、是等の諸宗教は全く空殼となり了らん、唯、如來あり、「ゴッド」あり、天あり、是を以て佛教存し、基督教存し、儒教存す、然るに如來といひ、「ゴッド」といひ、天といふもの、皆實在の觀念を言ひ表はせるものに過ぎず、其名稱の異なるは、地方言語の同じからざるに出づ、名稱の末に拘はりて、其實いかんを問はざるが如きは、是れ短見者の事のみ、固より歷史的に之れを考察すれば、實在の觀念に就いて多少の異同なきにあらず、然れども是れ毫も怪むに足らず、實在の觀念は大體に於て一致する所あるも、微細の點に於ては千人千樣なり、如來「ゴッド」及び天の觀念に就いて、餘りに峻別せんことを求むべからず、少くも其差異により、其一致を蔑如すべからず、同一の如來、同一のゴッド、同一の天の觀念に就いても、均しく差異點なきを得ざるものにて、若し嚴密に之れを言はゞ、二人として全く實在の觀念を同じくするや否や疑はし、然れども何人も少しく世界及び人生に就いて嚴肅に考察するときは、奇異の感なきこと能はず、奇異の感を了解せしむるものは實在の觀念なり、即ち現象を超絶せる平等相の觀念なり、此の如き觀念は古今といはず、東西といはず、何人も人として自然に要求する所なり、即ち人類自然の精神的需用に應ずる所なり、是故に假令ひ實在の

觀念が特殊の點に於て多少の異同あるを免れざるも、大躰に於て自然に一致する所あるものなり、如來といひ、ゴッド、といひ、天といふもの、皆均しく人類自然の精神的需用に應じて起れるなり、故に名稱こそ異なれ、其人類に對する關係に至りて全く同一轍に出づといふべきなり、古歌に

分け登る麓の路は多けれど同じたかねの月を見るかな、

とあるは、能くも此邊の消息を道破せるものなり、歷史的の宗教は各〻其特殊性あるが爲めに相容れずとするも、實在の觀念に於ては一致するを得るなり、其特殊性は惰性によりて遺れる障礙物に過ぎず、之れを打破し了はれば、一致點のみ存し得べきなり、然れども若し實在の觀念を否定せば、歷史的宗教は言ふまでもなく、之れに代はりて起るべきものも、亦根柢なきなり、例へば、唯物論者の如き、物質以外のものを認容せず、故に實在の觀念を否定し、宗教の根柢を奪ひ去るを願みざるなり、然れども唯物論者の見解は極めて淺薄にして徹底せるものにあらず、古來偉大なる思想家は殆んど相約せるが如く、崇高なる實在の觀念に到達せるは、決して偶然の事にあらず、此の如き崇高なる實在の觀念に到達し得べき自然の傾向、吾人々類の本性中にありて存するに由るなり、

實在の觀念は種々之れあるべきも、吾人の見る所によれば、原本的の活動の外實在とすべきものなし、原本的の活動は一切の創始者 the Initiative なりといふべし、世界に於ける一切の變化は、活動ありて後に期すべきことなり、若し活動なしとすれば、何等の變化をか期し得べき、吾人が實際經驗する所のあらゆる事物の發展は、活動之れが創始者たるを知るべきなり、例へば、進化論の如きは、覆載間に於ける萬物の發展を解釋すれども、萬物の原始いかんを解釋する者にあらず、固より萬物の發展を解釋するからには、溯りて原始の狀態を究明せんとせざるにあらず、然れども到底其本源を解釋し得るものにあらず、假令ひ萬物の原始は星雲 Nebula にありとするも、是れ決して眞の原始にあらず、其星雲はいかんして生じ來りしか、此の如くにしていかほど遠く溯るとも、全く

同樣にて、矢張一切の創始者たる活動の先在を認容せざるべからず、即ち知るべし、活動は進化以上のものなるを、進化は活動の實現にして、萬物發展の進行なり、故に進化は活動を豫想す、活動ありて而して後、進化の作用始めて行はるゝものなり、是故に進化律は萬物の發展を解釋するに足ると雖も、一切の創始者たる活動其物を解釋するに足らざるなり、然らば活動とは何ぞや、活動てふ名稱は假用せるものに過ぎず、若し嚴密に之れを言はゞ、此名稱は能く吾人の意味するものを言ひ表はせるにあらず、但近似的 approximate といふべきのみ、其故は已に活動といふ以上は、現象界に於ける多少の實現を意味す、多少の實現あらざる以上は、活動の活動たる所以、いかんして認容すべきか、活動は行動即ち運用にして吾人に顯現せられたるものなり、故に活動を指して直に實在といふこと能はず、然れども活動は最も近似的に實在を指示するものなり、抑活動は內外の兩界に共通なるものにして外界にありては原本的の創始者なり、然るに活動其物は果して何なりや、實現して痕迹を遺す、所よりして、吾人は之れを活動と稱すれども、活氣ともいふべき活動其物、即ち活動主義 thätiges Prinzip に至りては、吾人之れを認識することは能はず、蓋し認識を超絕して絕對たればなり、ヘーゲル氏曰く、絕對は概念すべからずして、感得し直觀すべきものなり、其概念にあらずして、其感情及び直觀が言語となり、言ひ表はさるべきなり、 Das Absolute soll nicht begriffen, sondern gefühlt und angeschaut, nicht sein Begriff, sondern sein Gefühl und Anschauung sollen das Wort führen und ausgesprochen werden. と、旨しかな言や、活動の結果は、認識の對象となれども、活動の本源は、絕對にして、認識の對象とならず、認識の對象となるものは、獨り差別相たる現象に止まる、認識の對象とならざるものは、差別相たる現象にあらざるなり、即ち活動の本源は無差別平等にして、現象の彼岸にあり、是れを實在となす（其詳細なることは弱輩論文二集に收載せる「認識と實在との關係に敍述せり故に之れを省略す）此の如き實在は一切宗教の根柢なり、若し絕えて實在なしとせば、宗教は俄然破滅すべしと雖も、實在は現に活動の本源として寫象せらる、唯是れあ

るに由りて宗教は永遠に破滅するの期なきなり、然れども吾人は尚ほ實在に就いて考察せざるべからず、客觀世界に於ける一切萬物の創始者は活動其物なり、然るに活動の結果は種々雜多なりと雖も、活動の本源は無差別平等なるが故に、唯一なり、唯一の活動其物は實在にして、世界に充實し、之れと同一躰なるが故に、此の如き實在の觀念は、必然に動勢的の萬有神教 Pantheismus に導かざるを得ざるなり、萬有神教の觀念は、宗教思想を助長するの力を有するに相違なきも、是れなければ宗教は成立せずといふ程に必要なるものにあらず、故に猶太教の如き、基督教の如き、回々教の如き、皆是れなくして宗教たることを得るなり、且つ萬有神教の觀念を基礎として成立せる宗教は寂靜主義 Quietism に陷り易く、人生に炎々たる活氣を與ふるの効なきなり、之れを要するに萬有神教の觀念は、今後の宗教に必須なりといふを得ざるなり、然れども客觀世界より一轉して、更に我れ自身に就いて之れを考ふるに、我れ自ら我れを生ぜしにあらず、我れ自ら是れ我れなりと

自覺するときには、我れは已に生ぜられたる結果なり、然らば何物か我れを生ぜる活動にあらずして何ぞや、我れ自らの生命も亦活動のみ、活動なければ身躰ありと雖も、我れあることなし、唯活動あるによりて我れあるなり、否活動其物即ち我れの本躰なり、然るに活動の中心は意志なり、意志なきの活動は何等の意味もなし、隨つて又道德的價値を有せず、何等か目的を有する動作云爲は、皆意志作用の結果なり、故に一として道德的價値を有せざるものなし、之れを要するに、一切の道德的動作は意志の惹起する所に係る、然るに意志は我れに於ける原本的活動なり、意志の結果は道德的動作として認識し得べしと雖も、意志其物は內界より發展し來たれる天與の活動にして、認識の境界を超絕するものなり、然れども意志は唯一人的個躰の中にのみ發動し來たるものなるが故に個躰的條件に制限せられ得べきものなり、個躰的條件とは、其個躰の個躰性より起る嗜欲を謂ふなり、若し意志にして個躰的條件に制限せらるゝとせば、其の結果は人類一般の公共的幸福と兩立し難きこと

なきを保せず、此の如くなれば、意志活動の發展は、到る處に沮礙せられざるを得ず、抑意志活動の發展は何等の處に於て成遂せらるゝか、獨り社會に於てのみ成遂せられ得べし、然るに意志が個躰的條件に左右せられ、社會公共の目的と齟齬する以上は、其社會に發展し得べき希望は毫も之れなく、到底自滅を招くの不幸を見るべきのみ、若し之れに反して意志が社會公共の目的と合一し、人類の當に取るべき正路を取りて發展せば、其結果は如何樣にも盛大となり得べきものなり、

思想の幼稚なるもの、多くは外界に現はれ來たる恐るべき勢力(即ち活動)を崇拜するの傾向を有す、例へば太陽、火炎、光明、風雨等の如き是れなり、若し思想開發して有する所の知識著しき進歩をなさば、是等自然現象は吾人の祈願すると然らざるとによりて吾人の冥福を左右するものにあらざるを了解し、復た之れを崇拜するの愚をなさゞるに至る、然れども此の如き客觀世界に對する思想の變動は、主觀世界に其影響を及ぼさゞるを得ず、乃ち向外的觀察は向内的省察となり、吾人々類の動作を律すべき根本主義を内界に於て發見せん、是れを一轉機となす、如來と云ひ、「ゴッド」と云ひ、天と云ふもの、皆各自方寸の中にあるもの、之れを外界に求むるも漠として得がたし、反りて之れを内界に求むれば、光の耿々として認むべきものあり、是れ大我の指導する所にして、如來と云ひ、「ゴッド」と云ひ、天と云ふもの、畢竟此れに外ならざるなり、蓋し人間は世界の一部分を有す、換言すれば、其個躰は世界に屬し、世界と同一躰たるものなり、但世界の中に於ける一箇の現象としては世界を離れ、單獨の個躰を成せるが如し、然れども世界は現象と實在との兩方面を有し、一方に於て現象たると同時に又實在たるものなり、是故に各個人も亦現象としてのみ存在するにあらずして、又實在として考察すべからざるものはなし、即ち各個人は現象と實在とを兼ね有して成るものなり、現象として之れを見れば、人間は個躰性によりて相互に區別せられ、彼れは彼れ、是れは是れ、箇々別々なり、實在として之れを見れば、空間、時間及び因果を超絶し、何等の差別をも附するを許さず、即ち平等無差別

なり、是故に各個人は個人たると同時に一切と合一し、平等無差別の實在と同体不離の關係を有するを免れず、實在は即ち宗教上所謂大我なり、如何なる個人も其小我(即ち個体性)に執着し、大我(即ち實在)の意志と齟齬するあらんか、忽ち己れが内界に擾乱を生せずといふことなし、是れ其自覺せざるを得ざる所にして、疾しき感じは是れが爲め起る、此の如くなれば精神の平和は到底望むべからざるなり、之れに反して大我の意志に從つて己れが動作を規定し、天眞自然の同情によりて一切を融合調和せば、即ち其個体性を超絶して無差別平等の實在と合一せば、天空海闊の地位を得て、自ら圓融無礙の態度に出づるを得ん、其結果たる曾に安心立命といふのみならざるなり、此の如く内界に認められたる實在は宗教の根柢にして、又倫理の根柢なり、彼れと是れと元來其淵源を異にするにあらざるなり、(大我小我の關係は尚ほ第七章に於て委しく叙述せん、)大我は嚴密に之れを言へば人格的のものにあらず、即ち超人格的のものなり、然れども世の宗教家は相互に傳説を蹈襲して之れを人格化し、其眞相いかんを把捉すること能はざるなり、彼等の所説、一顧を價せざるもの多しと雖も、亦嚴肅なる哲學者にして大我の人格を論證するもの之れなきにあらず、殊にロッツエ氏の如きは實在(即ち大我)の人格を論證すること甚だ務めたりといふべし、(Mikrokosmus)の第九卷第四章及び宗教哲學の第四章を見よ、其結論は大略左の如し、

各個人の人格は不完全なるものなり、完全なる人格は唯實在に屬するのみ、實在の有する完全なる人格は不完全なる人格を有する者の理想たるべきものなり、

是れ曾に傳説を支持するのみならず、又道德的動機に活氣を付與するの効なしとせず、然れども未だ以て實在の眞相を執へ得たりといふを得ず、其故いかん、人格は本と人間たる各個人に就いて言ふことなり、各個人はいかにして人格の觀念を得るか、蓋し自他の差別をなすは、人格の觀念を得るの初めなり、我れを我れにあらざる彼れに對して區別し、是れ即ち我れなりとの抽象的觀念を得て、遂に人格の何たるかを自覺

するに至る人格は各個人特質の精粹ともいふべきものなり之れを要するに人格てふものは人間が自他の差別をなす所の經驗によりて始めて得る所にして唯人間に就いてのみ言ふべきのみ若し失れ實在に至りては事全く之れと異なり一切の經驗を超絶し可想的 Intellegibilis の境界に屬す故に實在に就いて人格てふ觀念が經驗の結果として得らるべき謂はれあるなし實在は平等無差別にして認識の對象となるものにあらず故に何等の規定すべきものなく眞に「以心傳心」のものなり其完全なる人格なるや否や誰れか能く之れを知らん實在に就いて何人も之れを規定するの特權あるにあらず但何等の規定をもなすべからずといふことは何人に取りても一般に同じ實在は人格的とも非人格的とも規定し得らるべきものにあらず一切の規定以外に超然たればなり然るに之を完全なる人格とするは單に想像に過ぎず豈に肯定的に然か言ふべきものならんや人格は自他の差別の結果として抽象せらるゝが故に各個人の如き有限の者に就いてのみ之れを言ふべし無限の實在に就いて人格を言ふもの論理の撞着を免れず實在は絶對無限にして一切を包容し我れの我れにあらざるものに對するが如き自他の差別あるなし若し自他の差別ありとせば是れ絶對無限の實在にあらず然るに實在に就いて人格を言ふは隱然自他の差別ありとするものなり是れ其到底認容すべからざる所なり彼の實在を以て完全なる人格とするが如きは全く絶對無限の實在を人格化するものにして單に譬喩的 figurative の旨趣を有するに過ぎざるなり

然れども若し宇宙的に實在を考察し萬有神教的に宗教を寫象せば其結果は必ず佛教の如く寂靜主義 Quietism に陷らん是れ己れが行爲を律すべき本源宇宙に散漫して極めて漠然たればなり若し之れに反して己れが行爲を律すべき本源にして己れが頭腦中に存し不斷に炎々たる燒點を成すあらば一生の動作云爲自ら活潑なる發展をなすの傾向なかるべからず實在を以て完全なる人格とし是れを理想とし之れを實現せんとするもの此に得る所なしとせず然れども上來辯明せるが

如く、實在は嚴密に之れを言へば、超人格的のものなり、是故に單に譬喩的に之れを完全なる人格といふべきのみ、若し實在より人格の觀念を除き去らば、寂靜主義に陷るより外之れなきか、何ぞ其れ然らん、各個人と實在と共通なり、即ち其活動たるの點に於て同一體たり、實在は絶對無限の活動なり、各個人は其一部分を受けたる有限の活動なり、故に絶對無限の活動と方針を異にしては、些の發展をも成し得じ、但し之れに從つて發展する以上は永遠に其活動を實現するを得べきなり、此の如く實在を活動主義として寫象すれば、寂靜主義に陷るの弊は決して有り得べからざるを知るべきなり、或は曰はん、實在を大我と稱し、小我と同じく之れを我とする以上は業に已に人格とするものにあらずやと、若し論者にして大我は姑く便利の爲めに假用する名稱に過ぎざるを知らば、是等の疑惑は悉く立處に氷釋せんのみ、

第六章　宗教と道德

宗教は必ずしも、道德的動機に本づいて起れるにあらずと雖も、其倫理と關係あること少々にあらず、啻に兩者の間關係ありといふのみならず、此關係は、兩者の將來を指示するに足るものなり、從來世に行はれし宗教は自然教Naturreligionと文明教Culturreligionとの二種に分つを得、自然教とは何人の創唱せしといふことなく、自然民族Naturvölkerの產出せし所にして、古代神話に因由せる宗教の如きは、皆自然宗教なり、「ヂヤウス」崇拜「ミトラ」崇拜「バール」崇拜等は勿論、婆羅門教及び猶太教と雖も、亦此範圍を脫すること能はざるなり、文明教は、佛教基督教等の如く、自然教に繼いで起り、一層進步せる文明世界に行はれたるものにて、各偉大の人格ありて之れを創唱したる結果に成れり、再說すれば、自然教は祖師てふものなしと雖も、文明教は祖師あらざるものなし、蓋し人類智識の尙ほ甚だ幼稚なる時に當りては、自然教の付與する世界及び人生觀

は、各自の精神的需用を充たすに足りしならん、然れども人類智識漸次に開發し、一轉して文明の機運に向はんとするに當りては、自然教の不適當なると銳敏に感ぜられ、遂に之れを脱却して、局面を一變するの活劇、各處に流ぜられたり、釋迦の佛教に於ける、基督の基督教に於ける、皆自然教以外に生面を開き、文明教の基礎を成しゝものなり、然るに尚ほ自然教と文明教とを比較考察するに、自然教には、其崇拜する人格數多あり、故に多神教となる、猶太教の如きは唯一神教Monotheismus婆羅門教の如きは單一神教Henotheismusなりと雖も、是等は發達して此の如くなれるものにて、原始の自然神教は悉く多神教の形を成せり、然るに文明教にありては唯一個の人格ありて人類一般の模範たり、即ち其祖師、是れなり、佛教にありては釋迦、基督教にありては基督、何れも人天の導師にして、世界に於ける唯一の理想的人格として崇拜せらるゝ所なり、且つ又自然教は必ずしも倫理に關係なきにあらずと雖も倫理は自然教にありては決して主要のものにあらず、倫理以外の說話、反りて最大部分を占め、倫理の如きは寧ろ附屬的の關係を有するに過ぎざるなり、然れども文明教にありては、倫理は更に主要の地位を占め、各自の內界を律するの力、自然教の比にあらざるなり、自然教は其發達せる境遇時勢等の特殊性を帶ぶること多きが故に社會の進運に伴ひ難し、故に或は疾くに消滅せるもあり、例へば希臘古代の自然教の如き、是れなり、假令ひ消滅せずとするも、其發達せる一地方、若くは一民族に止まりて、廣く他地方、若くは他民族に傳播すること能はず、婆羅門教の如きも獨り婆羅門種族間に止まりて其れより以外には曾て傳播せず、又傳播すべき謂はれなし、是れ婆羅門種族としての信仰なればなり、猶太教の如きも亦之れと同じく、獨り猶太人種のみの信仰として存し、未だ曾て他人種に傳播せしことあらざるなり、婆羅門教や猶太教すら此の如し、況んや一層幼稚なる自然教に於てをや、然るに文明教は之れと大に異なり、其特殊性を有すること、自然教に比すれば、適に少くして、且つ倫理を主とし、己れを律する力を內界に得せしむるが故に、廣く他地方若くは他民

族に傳播するを得るものなり、即ち佛教の東洋諸國に傳播し、基督教の西洋諸國に傳播せるが如き、之れを自然教に比すれば、實に著しき相違なりといふべし、

上來論述せるが如く、過去の宗教を皆見すれば、自然教より文明教に推移して多大の進歩を成せり、然るに文明教の如き、今後如何樣になるべきものなるか、其起原を問へば、殆んど二千年に近きもあり、又二千年を過きたるもあり、此の如き宗教が永遠に存續するを得べきか、文明教も亦自然教と同じく一變して他の形を取るべきものにあらざるか、此の如く疑問を發し來れば、吾人は直に宗教の將來に關する重大なる問題に接せざるを得ざるなり、更に又文明教の性質を考察し、之れを理想教 Idealreligion に比するに、左の四種の缺點を發見す、

○(一)文明教は自然教に比すれば、迥に倫理的となれり、是れ確に宗教としての進歩なり、然れども未だ全く倫理的とならず、尙ほ直接倫理に關係なき教義、說話、儀式等を有すること少しとせず、是れ其一轉すべき進行の途次にあるの證なり、理想教としては、全く倫理的となりてはらざるべからざるなり、

(二)文明教は自然教に比すれば、荒誕無稽の說話は確に減少し、合理的方面に進歩せること疑なし、然れども未だ全く荒誕無稽の說話を脫却せず、種々なる迷信、之れに附隨して來たれり、理想教としては悉皆迷信を脫却し、世間的、現實的、合理的たらざるべからざるなり、

(三)文明教は自然教に比すれば、特殊性を有すること少くして、迥に普遍的なり、即ち廣く傳播すべき性質を有す、然れども尙ほ幾多の特殊性を有し、決して全然普遍的と言ひ得る迄に普遍的ならず、佛教は印度的特質を帶び、基督教は猶太的特質を帶び、乃至拜火教、回々教等も各其特質を帶び、相互に拒絕して、社會に並び行はる、普遍的とは唯比較的に言ふべきのみにて、眞に普遍的なるにあらざるなり、理想教は全く普遍的ならざるべからず、少くも總べての特殊性を離れて全く普遍的たるべき性質を具有せざるべからざるなり、

（四）自然教は數多の人格を崇拜し、文明教は唯一の人格を崇拜す、數多の人格より唯一の人格に推移せるは、理性統一の必然的傾向に合せる進行にして、是れ亦宗教としての進歩なりといふべし、然れども、未だ全く人格を超絶せる實在を以て宗教の根柢となすこと能はず、理想教としては全く人格を超絶せる實在の上に建設せられざるべからざるなり、

此の如く文明教は自然教に比してとそ一層進歩せるものなれども、若し之れを理想教に比すれば、尚ほ未だ足らざるもの多きを見る、佛教といはず、基督教といはず、總べて世界の文明教が歳に月に衰退しつゝあるは、蓋し自然の結果といふべきなり、佛教の沈淪は、今更言ふまでもなく、基督教と雖も、其萎微振はざること甚しといふべし、是れ唯、日本に於て然りといふのみならず、西洋に於て亦然り、ソールダー氏曰く、

基督教其れ自身は崩壞して消滅しつゝあるなり、基督教は今日科學及び史的批評の新しき間接の感化により嚴肅にして且つ思慮ある人の精神に於て動搖せらるゝに比すれば、前世紀に於てペイン氏及びヴォルテール氏により半分も然かせられざりき、決して自由思想の通俗的演說を聽かざるもの、決してペイン及びヴォルテールを讀まざるものも、其呼吸する知性的大氣より新しき世界觀を受く、而して怪異祈禱及び豫察に關する古風の觀念は、其損失を覺知せざる程、靜に消滅しつゝあるなり、

是れ西洋に於ける基督教の現狀を概論するものなり、思ふに文明教の衰退する原因は科學の進歩と社會の變動とにあり、科學は文學復興以來著しく發展の徴を現はしゝと雖も、前世紀に至りて、成功最も盛んに、人目を眩するばかりとなれり、科學の進歩は、即ち認識の進歩なり、認識の進歩に從つて自由思想一般に普及し、苟も教育あるものは、荒誕無稽の說話を信ぜざるに至れり、又科學進歩の結果として、社會の變動は甚しく、殆んど歳に月に別世界に入るの感あり、是れ蓋し便利なる交通の機關の發明に本づくものの多きが如し、

然らば宗教てふものは、漸次に消滅し、遂に全く痕迹なきに至るべきか、いかん、之れに答へて然りともいふべく、又然らずともいふべし、若し宗教の或る形を執へて、是れを即ち宗教なりとせば、此の如き宗教は永遠のものとするを得ざるが故に、然りと答ふるを得ん、然れども宗教の本躰を執へて之れを言はゞ宗教は永遠不滅にして、人類と共に存すべきものなり、宗教の本躰は、人類自然の性に根柢するが故に、其れ自身には何等の變化なしとするも、其取る所の形は歳時に從つて異に、方處に因りて同じからざるなり、換言すれば如何なる宗教も、歴史上變化を免れざるものなり、宗教の變化は殆んど無意識的に行はれざる時なかるべしと雖も、又時ありては有意識的に著大なる變動を與ふることあり、即ち宗教の革新 Reformation 是れなり、釋迦の婆羅門教以外に一生面を開き、遂に佛教の基礎を成したるは、彼れ自身の創見に出でたるに相違なきも、婆羅門教と歴史的關係を有せざるものにあらず、其實佛教は婆羅門教を革新せるものにて、釋迦の事業は革新に外ならず、是故に婆羅門教と佛教とは親子の如き關係を有す、但、佛教は婆羅門教より一層進歩せるものなり、基督の猶太教以外に一生面を開き、遂に基督教の基礎を成したるは固より其獨特の見に出でたるも、是れ亦革新なり、即ち猶太教の革新に外ならず、是を以て基督教は猶太教と親子の如き關係を有し、猶太教より思想の系統を引くものなり、釋迦は何故に婆羅門教の革新を成しゝか、基督は何故に猶太教の革新を成しゝか、釋迦の時に當りて婆羅門教は種々なる弊害を生じ、何等か變動を起すにあらざれば、社會は其不正不義に耐へざらんとせり、麻蒐の法典は能く此邀の消息を洩せり、釋迦偶、新氣運の代表者となりて革新の事業を成せり、基督の時に當りて猶太教の弊害、實に甚だしく、大打擊を加へて、其暴威を殄滅するにあらざれば、不正不義は殆んど底止する所なからんとせり、試に之れを福音書に徵せば、思半に過ぎん、基督偶、社會の代表者となりて革新の功を奏し、新氣運の轉開を助長せり、佛教起れるが爲めに婆羅門教消滅せしかといふに、未だ必ずしも消滅せず、婆羅門の信仰として存續せ

り、基督教興れるが爲めに、猶太教消滅せしかといふに、未だ必ずしも消滅せず、猶太人の信仰として存續せり、然れども婆羅門教は數千年の歴史を有しながら、何等の顯著なる發達進歩をも見ず、此の如き宗教を尊信する民族も、亦何等の顯著なる發達進歩をも成し得ず、佛教を崇拜せる民族中には、例へば、日本の如く、寛弘の氣象を帶びて、隆々として世界に飛躍せんとするものあり、猶太教も亦婆羅門教と同じく、數千年の歴史を有しながら、是れといふ顯著なる發達進歩をも見ず、此の如き宗教を崇奉する民族は到底其信仰と反對の進路を取ること難し、是故に猶太人中より間、特殊の人傑を出だせしことはありと雖も、民族としての發達進歩は毫も顯著なる者にあらず、之れに反して基督教を尊信せる民族は多くは顯著なる發達進歩を成し、遂に今日の如き燦然たる文明を現出せり、蓋し釋迦の時に當りて進歩的の精神あるものは婆羅門教の下にあること能はず、滔々として佛教に歸依せり、基督の時にありても、亦之れと同じく進歩的の精神あるものは、猶太教を以て滿足すること能はず、一轉して基督教に移れり、此の如き變動は時勢境遇の然らしむる所にして、發達進歩の順序として、亦免るべからざる所なり、

今や佛教と基督教と我邦に相接し來たり、各其特殊性に拘泥して相容るゝこと能はず、是を以て彼れと是れと宗教上の權勢を爭ひ、殆んど底止する所なからんとす、佛教も基督教も、本と婆羅門教若くは猶太教の如き民族的宗教を一變して普遍的宗教となしたるものなりと雖も、事已に此の如くなりたる以上は、決して眞に普遍的宗教にあらず、假令ひ比較的には尙ほ普遍的宗教といふべきも、絶對的には、然かいふべきにあらず、何んとなれば、相互に拒絶して、融合調和の期なければなり、佛教も基督教も今日にありては、殆んど當時の婆羅門教若くは猶太教の如くになれり、佛教は東洋人の宗教にして、基督教は西洋人の宗教として見るべき以上は、未だ全く人種との關係を脱却すること能はざるものなり、佛教も基督教も、其發展の歴史は未だ結了せざるも、其全盛時代は已に過ぎ去れり、草木ならば、漸く秋霜を經て黄落せんとするものなり、

其現在有せる勢力は殘餘の勢力のみ、あらゆる榮華の夢は唯往時に追ふべきのみ、是等の宗教は今後長足の進歩を成さんとする人類に適應せず、故に人類にして是等の宗教を信奉せば、之れが爲めに進歩を沮碍せられ、固陋の境遇に退嬰するの恐れなしとせず、若し人類にして長足の進歩を成さんか、是等の宗教を背後に遺さゞるを得ざるなり、人類の進歩は特殊の歴史的宗教よりも重大なり、進歩の爲めには、佛教若くは基督教と雖も之れを抛棄すること已むを得ざるなり、換言すれば、人類の生命には、佛教若くは基督教よりも尚ほ重大なるものありて存するなり、其重大なるものといふは、進歩に外ならず、進歩の爲めには唯道德を要するのみ、道德は佛教若くは基督教に代はりて宗教の地位を占むべきものなり、是れを理想教となす、理想教が興りたればとて佛教若くは基督教が忽ち跡を潛め、復た殘骸を留めざるべしとはいはず、比較的に時代の進歩に後れ、保守思想に富めるものは、是等の宗教を崇奉すべし、但進歩的精神あるものは、是等の宗教を後に遺して前進し、人類自然の天職を遂げんとするなり、然れども過去の宗教に代はるものなくしては危險にして陷溺の恐れあり、此の如き需用に應ずるものは、人類の行爲を律するに足るべき効力ある道德なり、此の如き道德は將來の宗教にして、一切の特殊性を離れ、何等の迷信をも帶びず、人類今後の進化發展を催進するに足るものなり、乃ち知るべし、過去の歴史的宗教は漸次に消滅の途に就くべきも、倫理的宗教之れに代はりて興るべきを、果して然らば、凡そ宗教は古今を一貫して存するものにして、變化は獨り其形體のみに關すること、復た疑なきなり、

宗教其物と宗教の形體とは、固より辨別して考察すべきものなれども、動もすれば、啻ち之れを混同し、宗教其物を信奉するの念を移して、宗教の形體を信奉し、宗教の形體の敗滅を以て宗教其物の敗滅とするの傾向あり、如何に過去の宗教の形體を愛護せんとするも、已に時勢と境遇とに適應し難きものとなりたる以上は、其精神は殘骸を留めて、他所へ移り行くものなり、換言すれば、宗教其物には、寸毫の異變なきも、其形體

は變化を免れざるものなり、是故に宗教に就いては、最も變通の妙を知らざるべからず、何をか變通の妙といふ、變通とは、時勢境遇の變化を見て、宗教の形體を改更し、之れに人類を指導すべき精神を付與するを謂ふなり、是れを宗教の革新となす、釋迦若くは基督の時に當りては、彼等の遂行せしが如く遂行すべかりしならん、然れども今日は當時と時勢境遇大に異なり、故に今日にありては、今日の時勢境遇に適應する樣に遂行せざるべからず、其遂行する精神に至りては、釋迦若くは基督と固より異なる所なし、但其手段方法を異にするのみ、弘法傳教法然日蓮親鸞等の如きも、當時にありては、其時勢境遇に適應するが如くに遂行せり、然れども若し今日にありて、彼等の事蹟に拘泥して一も二も之れを模倣せば、決して成功するの望あるなし、今日は今日の時勢境遇に適應せんことを期せざるべからず、若し彼等をして今日に再生せしめば、必ず今日の時勢境遇に適應するが如くに遂行するに相違なし、是れを變通となす、古代にありては人智未だ開けず、上下を通じて皆迷信界に行動せり、斯時に當りて假令ひ合理的の宗教を唱出するも、いかんして偉大なる影響を及ぼすを得ん、然れども今日となりては、佛教といはず、基督教といはず、是等は皆殆んど二千年若しくは二千年以上の古物的宗教なるが故に無數の迷信を混入し來たれり、此の如き迷信は害ありて益なし、然れども已に佛教若くは基督教に附隨して起り、其骨となり、血となれるが故に、到底之れを除去すること能はず、是れ其今日の時勢境遇に適應せざる所以なり、加之、世界の人類は漸く相接近し來たり、已に業に世界的社會を成しつゝあるに、佛教も基督教も各其特殊性に拘泥して相拒絶するが如き、尙ほ更其世界的傾向と逆行せるを證するものにて、宗教の革新を要すること眼前に迫り來たれり、然るに憒然として之れを自覺せざるは、畢竟變通を知らざるに坐するのみ、

若し道德の實行を期する倫理的宗教を以て佛教若くは基督教に換ふるときは、東西洋を通じて毫も扞格する所なく、反りて人類の世界的統一を催進するの効あること疑なし、此の如き精神的產物の實行主義に

あらざるよりは今後の世界的宗教となすに足らざるなり然れども倫理的宗教に反對して左の如く言ふものあり曰く、

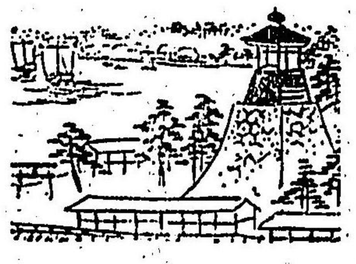
倫理と宗教とは別物なり倫理は各個人が社會に於て交際上實行すべき所にして宗教は各個人が宇宙に對して得る所の安心立命なり、故に宗教は倫理のなき處にあり得べく倫理は宗教のなき處にあり得べきなり、

是れ一應道理あるが如し然れども一歩を進めて之れを考察するに固より膚淺なる見解にして抑又倫理てふものゝ根柢を蔑如せるものなり倫理は各個人が社會に於て交際上實行する所に相違なし然れども倫理を實行する根本主義は世界及び人生觀に本づかざるべからず若し宇宙に對して安心立命の地位を得るにあらざれば倫理は各個人の胸中より徹底したる實現を成すこと能はざるなり道德的行爲の結果は事實として社會に痕迹を遺すこと復た否定すべからず然れども凡そ道德的行爲を惹起するものは何ぞや意志活動なり意志活動が如何なる方針を取りて實現し來たるかは一切の認識と感情とによりて規定せらるゝものなり特殊の道德的行爲は特殊の認識と感情とによりて規定せらるべしと雖も世界及び人生觀は道德的行爲の全躰を規定するの効あるものなり蓋し世界及び人生觀は一切の認識と感情との統一に外ならず是を以て道德的行爲の全躰を左右するの効なきこと能はざるなり唯心的世界觀が之れに相應する道德的行爲を惹起すること何人も顯着物的世界觀が之れに相應する道德的行爲を惹起すること、何人も顯着なる事實として之れを認容せん凡そ宗教が道德的行爲を律するの力を有するもの亦全く其世界及び人生觀より來たるなり世俗的風儀に盲從するものは、いざ知らず苟も人的行爲に就いて考察する丈の思想力を有するものは世界及び人生觀を立するにあらざれば道德的行爲の全躰を規定する上に於て惑なきこと能はず是れ哲學的基礎の必要なる所以なり若し世界及び人生觀を立し哲學的基礎を得るに至らば宇宙に對する安心立命の地位も亦得られずといふことなし宇宙に對

する安心立命の地位を得るは是れ即ち其人の自得なり此の如き自得なくしては眞に徹底せる道德の實行いかんして期すべき自得は德なり丙に得る所あるなり丙に得る所あるもの外に發して始めて道德的行爲となるを得るなり若し宇宙に對する安心立命の地位を得ずして、單に交際上道德的行爲をなさんとせば中々に功を奏し難し何故なれば斯る場合にありては道德は表面的となりて本心より徹底することは能はざればなり上下一般の腐敗墮落を浩歎し道德々々と絶叫するも道德の實行遂に畢がらざるもの其基礎たる世界及び人生觀の未だ得られざるが爲めなり反對論者は倫理なき處に宗教ありといへども宗教は自得を付與するものにて決して倫理と絶緣のものにあらず又宗教なき處に倫理ありといへども宗教の如く自得を付與するものあるにあらざれば倫理も其實行の基礎を得ると能はざるなり之れを要するに今後は世界及び人生觀を基礎とせる倫理(即ち宗教的倫理)さへあれば足れり是れ即ち將來人類の宗教たるべきものにして一切過去の宗教の如き最早其必要あるを見ざるなり

實行的倫理が一切歷史的宗教に代はりて行はるべき實例は儒教之れを示せり儒教は宗教の如き形體を有すれども其實德教なり即ち單に道德の實行を以て其主義とせり然るに儒教を崇奉するものは獨り儒教のみを以て滿足するを得たり此の如く今後の宗教は道德の實行のみにて足れり然れども今更に儒教に復歸すること能はず儒教に種々なる缺點ありて最早今日の時勢境遇に適せざるものとなりたればなり例へば其人權を說かざるが如き自由を敎へざるが如き進步思想を有せざるが如き論理哲理の觀念に乏しきが如き算へ來たれば殆んど指を屈するに遑あらざらんとす且つ儒教に於ては理想を取り遠へたり理想は資料を過去に取ると雖も未だ曾てあらざりし底の至善の情態なり即ち頭腦中に描出する所の觀念にして全く將成的のものなり然るに儒教は唐虞三代を以て理想的の國家とし堯舜禹湯文武周公を以て理想的の人格とせり是れ理想を過去に取るものなり此の如き理

想と雖も、之れを實現するは、將來にありと雖も、其實現せんとする理想は過去にあるなり、此の如くなれば、唯一背進の一事あるのみ、進化發展を遂行せんとするも、欄柄、手に入るべき間はれなきなり、支那文明が已に三四千年の久しきを經て、進寸退尺するもの、以なきにあらざるなり、是故に儒教は今後の德教としては取るべからざるも、唯實行的倫理が宗教の地位を占め得べきことは、其史的事實によりて之れを證明せりといふべきなり、



第七章　理想的宗教即ち理想教

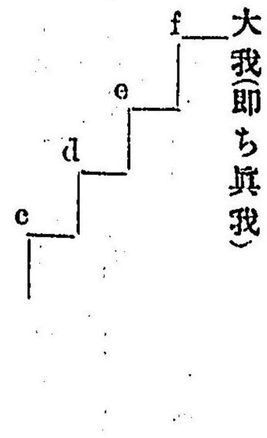
理想教の何たるかを叙述せんとするに當りて、先づ世界文明の潮流を一瞥するを要す、世界文明の潮流いかに錯雜せるが如きも、之れを大別すれば、畢竟二種に歸す、一は歐羅巴文明にして、一は亞細亞文明なり、此二種の文明は將に融合調和せんとして、未だ全く融合調和せず、兩々對立して今日に至れり、然るに歐羅巴文明の潮流は、歐羅巴人種の繁榮膨脹と共に澎湃として渾圓球上に普及し、殆んど亞細亞文明を壓倒して、之れをして窒息せしめんとするかの如き看あり、然れども亞細亞文明は少くも四千年の歷史を有し、反應力隨つて又强大にして、其中一種特質の認容すべきものなしとせず、果して然らば世界人類の進化發展の爲めに、豈に亞細亞文明に顧慮する所なくして可ならんや、此時に際し、て、日本民族は、其天職を自覺せざるべからず、其天職とは、何ぞや、他なし、歐羅巴文明と亞細亞文明とを融合調和すると是れなり、亞細亞洲民族

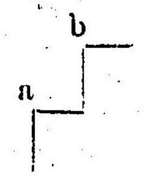
少しとせずと雖も、其最も能く歐羅巴文明を了解せるもの、日本民族に若くはなし、是故に歐羅巴文明を輸入して之れを亞細亞洲に傳播し得るもの、日本民族を措いて他に求むべけんや、殊に支那朝鮮印度暹羅等の諸國、漸く日本を景仰し、其指導に賴らんとするの傾向を生ぜる矢先なるからには、先進國として、是等諸國を文明の域に導くべき自然の任務の存すること、豈に疑を容るゝの餘地あらんや、顧みて又之れを考ふるに、亞細亞文明は千數百年來東漸して其精粹大に日本に集まれり、乃ち最も能く歐羅巴文明を了解せる日本民族は、又亞細亞文明を歐羅巴人種に紹介するの地位に立つものにあらずして何ぞや、歐米の學者中間、東洋の哲學宗教等を攻究するものありと雖も、亞細亞文明の眞相に至りては、未だ能く知られざるもの多し、是故に歐羅巴人種は獨り自己尊信する所を以て、眞理とし、亞細亞人種の尊信する所の如きは、皆虛僞なるが如くに思惟し、自尊排他の念、炎々として焚えて已まざるなり、佛教は亞細亞人種の宗教にして、深遠なる教義を有するものなり、基督教は本と亞細亞洲に起ると雖も、殆んど二千年間歐羅巴人種の宗教となれり、宗教として活氣ありと雖も、教義は佛教の如くに深遠なるものにあらず、然れども基督教の宣教師は基督教を以て世界に於ける唯一の眞宗教となし、又基督教の神を以て世界に於ける唯一の眞神となし、佛教を始め、其他總べて自餘の宗教を毗排侮辱すること甚だし、若し、公平に、人道上より看來たれば、是れ決して其當を得たる所爲にあらざるなり、日本民族は歐羅巴人種の權勢に媚びて、妄に基督教を奉迎すべきにあらず、佛教の如き深遠なる宗教、已に日本に存すればなり、然れども又佛教の舊態に戀々として、基督教を拒絕せんか、進歩の望、甚だ少きなり、基督教の活氣、反りて佛教に優るものあるを忘るべからざるなり、之れを要するに、日本民族は、佛教と基督教とを融合調和すべき天職を擔へるものにして、此天職を決行するに最も適當なる地位に立てり、佛教は亞細亞文明を代表し、基督教は歐羅巴文明を代表するものなるが故に、今佛教と基督教とを融合調和するは、東西二種の文明を打ちて一丸と

なすものなり、是故に日本民族は東西二種の文明を結婚せしむる媒介者なりといふべきなり、

佛教と基督教とは、いかにして融合し得らるべきか、佛教も、基督教も、皆それ〳〵特殊の歴史を有するが故に、其儘之れを融合調和せんとするも、決して其能くすべき所にあらず、唯理想に於てのみ、此二種の宗教を融合調和し得べきなり、否、一切の特殊の宗教は、變形して唯一の理想教に歸するを得べきなり、蓋し自然教は民族的歴史の關係を免れず、佛教若くは基督教の如き文明教は、已に民族的歴史の關係を免るゝと雖も、尚ほ祖師の歴史的關係を免るゝこと能はず、若し夫れ理想教は過去を顧るものにあらずして、單に將來を望むものなり、理想は現實Actualityに對する將成Potentialityなり、將成の理想は前程萬里にあり、未來永遠にあり、固より何等の歴史をも有するものにあらず、故に一切の人類をして此に共通の目的を發見せしむるを得るなり、理想は現在よりは一層よき情態なり、如何なる人も實際に於ては完全なるものにあらず、是を以て理性の要求に從ひ、一層よき情態に向つて進化發展せんと欲せざるはなし、其一層よき情態は即ち理想なり、然れども此の如き理想は比較的のものに過ぎず、終局の理想は至善Summum Bonumにして絶對的のものなり、此絶對的の理想は大我にして此理想を實現せんと努力する者は小我なり、各個人の自我は其思想感情及び意志の統一にして、即ち所謂統覺Appercepticnなり、曾て何等の自覺もあらざりしも、今は是れ個躰的の自我なりと自覺するもの、是れを經驗我となす、經驗我は小我としての自我なり、小我として、の自我は、個々別々にして、千人千樣、萬人萬樣なり、然れども大我として、の自我は唯一なり、自我に畢竟兩方面あるなり、小我としての自我と大我としての自我と、是なり、小我は現象として個躰を成せるものにして、大我は實在として一切の小我を統一せるものなり、無數の小我は唯一の大我を根柢として成立せり、故に小我として見れば、彼此の差別あり、若し大我として見れば、彼此の差別あることなし、然るに小我は變化して一定せざるものなり、或は品性墮落して

惡化するものあり、或は向上的進路を取りて改善するものあり、其改善するに當りて理想なかるべからず、理想を實現することが改善なり、理想を實現することなくして、改善てふことの成し遂げらるべき謂はれなし、然るに終局の理想は大我なるが故に、道德上の進化發展は小我が大我の理想を實現せんと努力するによりて遂行せらるゝものなり、小我は暫有的のものにして常住不變の情態なきが故に、眞我にあらずして假我なり、唯一大我のみは常住不變なるが故に眞我なり、即ち理想的の自我なり、小我は現在の不完全なる情態を一變して完全なる大我の情態に近寄らんとす、故に眞我は將來にあるなり、理想的の自我即ち是れなり、小我進修の歷程は、左の如し、





若し小我がaの地位より進んでbの地位に達すれば、aの地位の小我は、已に消滅して實際あるものはbの地位の小我なり、從前より一層改善せる小我なり、此の如くにして次第にbよりc、cよりdに進み、向上的進路を取らば、一歩は一歩より大我の理想に近寄ることを得るなり、如何なる人も大我の理想に近寄れば、近寄る程、救濟せらるゝなり、不幸の境遇を脫却して幸福多き境遇に移轉するが故に是れを救濟せらるといふを得べし、然れども其實他力によりて救濟せらるゝにあらずして自我が自我を救濟する自力の結果なり、然るに大我の理想は到底實現し了はるの時期あることなし、唯一永遠に之れに近寄るといふべきのみ、若し理想を實現し了はらば、是れ終局に達したるものにして、進化發展てふことは、復たあり得べからざることなり、理想の幾分かは實現し

得べきも、理想の全體は到達し得られざるものにて、理想は常に未來永遠にあり、故に小我の進化發展に際限あることなきなり、小我は夢幻にあらずして、現實なり、現實の小我は不完全なるを以て理性の滿足する所にあらず、故に一時一刻も速に理想を實現して進修の途に就くを要するなり、是れ自己目的にして、即ち理性の要求に應ずる所以なり、人間當行の路は、之れを置いて他に求むべきにあらざるなり、理想は將成にして、現實に對するものなるが故に、今茲に客觀的に發見し得らるゝ者にあらずして、唯主觀的にのみ之れあり、即ち吾人々類の頭腦中に觀念として存するに過ぎざるなり、假令ひ觀念として存するに過ぎずとするも、理想は吾人々類を活動せしめ、隨て又進修の途に就くを得せしむるものなり、故に理想は人間社會改善の本源として、實力あることと、以て知るべきなり、自覺的生物たる吾人々類に取りては、理想は向上的進路に導く神火の如し、凡そ進化發展は、唯理想あるによりて成し遂げらる、若し理想なしとせば、假令ひ進化發展せんとするも復た之れを奈何ともするを能はざるなり、此れに由りて之れを觀れば、理想の吾人々類を鎔鎔陶冶すること甚だ顯著なるが如きも、其影響の偉大なるに至りては、天下何物か能く之れに匹敵するを得んや、理想は經驗を累ね、智識を積むに隨つて發達するものなるが故に、各個人同一程度の理想を有すとはいはず、然れども何等の理想をか有せざるものなし、是れ改善の路の何人にも全く杜絶され居らざる證なり、之れを要するに、理想は各個人の頭腦中に宿れり、然るに理想の終局は大我にして唯一なり、唯一の理想たる大我は其影像を各個人の頭腦中に留むるが故に、之れを譬ふれば、猶ほ一痕の月の萬水に映ずるが如し、各個人がいかに我執に拘泥し、相互に拒絶すと雖も、理想に於て契合點を發見するを得べきなり、何となれば、彼我の理想は、皆大我の理想の分身なればなり、若し一層推究して大我の理想に到達せば、萬人同一の根柢を有するを知るべきなり、博愛といひ同情といふもの、皆此の如き同一の根柢によりて生じ來たらざるはなし、畢竟大我は一切の差別相を包含して融合調和するも

のなり、今理相、教は大我の理想を基礎として立つもの、故に佛教とも基督教とも支吾する所なく、一切の宗教をして此燒點に歸着せしむるに足るものあり、

大我てふものが理想教の基礎たることは、上來辨明するが如し、然るに大我は實在を理想化したるものなり、實在とは何をいふかなれば、是れ他なし、世界の本躰をいふなり、世界は哲學上より之れを言へば、現象と實在とより成る、現象と實在とは箇々別々に之れあるにあらずして、合一して一躰たり、換言すれば、現象と實在とは、世界の兩方面なり、即ち同一の世界にして一方面より之れを見れば、現象、他方面より之れを見れば、實在なり、現象に相即して實在を發見し、實在に相即して現象を發見し、現象と實在と二にして一、一にして二なり、故に是れを現象即實在といふ、（委しくは睡軒論文二集中の「認識と實在との關係」に見ゆ、故に之れを略す、）然るに如何なる個人も亦世界の一部分なり、是故に世界と同じく現象と實在との兩方面を具有す、現象としては個體我にして世界の一部分なり、個體主義principium individuationis により個人と稱する差別相を成すものなり、然れども又同時に實在なり、即ち個體我を超絶する無差別平等の方面を有する者なり、故に實在としては、個人も個人ならず、個人を個人として辨別するは、現象界の事に限る、若し現象界の個人を執へて、個人てふ者の眞相は、此に盡くとせば、是れ甚だしき謬見に屬す、更に又一轉して實在の方面より個人を考察するにあらざれば、其眞相は到底了解し得らるゝものにあらざるなり、吾人は外界に於ける凡百の現象に就いては、秋毫の微と雖も之れを辨別し得る程、精細に認識する所あり、然れども、然く精細に認識する所の主人公は、果して何物ぞや、若し一たび倒逆して內界の本體を認識せんとすれば、毫も得る所なきなり、是れ內界の本體は形而上的にして、不可辨識主義principium indiscernibiliumに屬すればなり、吾人自身の本體が認識の對象となると能はざるは、其無差別平等にして、一切の現象を超絶するを證するなり、即ち吾人自身の本體が現象界の如く、空間時間及び因果の規定を受けず、全く過境的の世界を成すを證するなり、是

故に認識の境界に於ては、個體主義によりて、彼我の別ありと雖も、吾人自身を本體として之れを考察すれば、唯一の無限あるのみ、「チャンドギヤ、ウパニシャド」(七、廿五、一及び二)に云く、

實に無限は下にも上にも後にも前にも右にも左にもあり、無限は實に一切是れなり、從ひて無限の解釋は、即ち我なり、我は下にあり、我は上に在り、我は後に前に右に左にあり、我は總べて是れなり、次ぎに無限の解釋を精神とす、精神は下に上に後に前に右に左にあり、精神は總べて是れなり、

是れ全く詩的に吾人自身の本體を形容せるものなり、此の如く考察し來たれば、吾人自身の本體は一切世界の不可思議を含有せる心靈的倉庫といふも不可なきなり、此の如く論じ來たれば、或は吾人自身の本體を以て消極的とするものあらん、若し認識の對象とならざる點より之れを言へば、消極的なるに相違なきも、實在其物は決して消極的のものにあらず、實在其物は活動主義 Thätigkeitsprinzip にして、進化發展の目的を具有するものなり、故に各個人の頭腦中に進化發展の必要を自覺せざるを得ず、是れ內界より實在に付與せられたる目的觀念によりて刺激を受くるに本づくなり、此の如き目的觀念に從つて理想を實現すると、是れ理想の要求なり、然るに其終局の理想は實在に外ならず、但實在が實行の規範となりたる時、始めて理想として吾人々類の頭腦に映寫し來たるなり、實在は世界に關する知的解釋の根本主義として命名する所に係る、若し實行の規範として之れを見れば、是れを大我と稱す、大我は道德上終局の理想を指して言ふものなり、道德上の進修的歷程は、小我が自己を變化して改善し、大我の如くならんと努力する所にあり、然れども小我が現象界に於て全く大我の如くなること能はず、小我は有限のものにして、如何に努力するも客觀的に大我の如く無限となること能はざれば、なり、但主觀的には殆んど無限の境界に達し得べからざるにあらず、其故は小我は思想、感情及び意志の統一なり、然るに其思想、感情及び意志の統一が世界的となりて一切人類を率いて終局の理

想に導かんとするに當りては、殆んど大我と擇ぶ所なからんとす、釋迦基督及び孔子の如きは、蓋し此の如き崇高の地位に達し得たるものなり、然れども此の如きは、人類の歴史に於て極めて稀なる除外例に屬す、普通の場合にありては、小我は唯、無限漸近的に大我の理想に近寄るといふべきのみ、

若し吾人々類の生命にして何等の理想をも實現することなしとせんか、進化といふことは、固より期し得べからずして、唯一退化の一事あるのみ、理想なきの生命は流れざる池水の如く腐敗せざるを得ざるなり、頭腦中生ける理想を描出し、刹那々々に之れを實現せんと努力する生命は、蛻殼を蟬脱して反覆蘇生するが如く、日々清新爽快なるを得るなり、之れを譬ふれば猶ほ岩石の間より迸出する源泉の、滾々として流れて汚濁を混ぜざるが如し、理想は精神的生命の源泉なり、理想を實現せんと努力すれば、炎々たる不斷の活氣を生ず、是に於てか生命は唯進化發展するのみにて、復た退化に陷るの恐れあるなし、此の如くなれば生命に一定の目的あり、又一貫の旨趣ありて、始めて理性の要求に戻らざるを得べきなり、何人も其立つ所の地下を發掘すれば、源泉を發見せん、恰も其の如く、理想を求むれば、理想乃ち頭腦中に映寫し來たる、精神的生命の源泉、之れを置いて他に求むべからざるなり、蓋し各個人の小我は之れを自覺するに當りて必ず其一小局部に制限せられ居るを發見するなり、一小局部に制限せられ居るといふことは、耐ふべからざる苦痛なり、此苦痛を排除して、自由の境遇を得んが爲めに煩悶せざるはなし、然るに自由の境遇を得んには、唯一の血路を開いて奮躍突進するにあるのみ、其唯一の血路といふは、他なし、理想を實現して永遠に進化發展して已まざること、是れなり、理想を實現して永遠に進化發展することは亦進化の法則に合す、進化してふことは不完全より完全に向つて變遷するを謂ふ、果して然らば進化は一定の秩序を指示する者なり、即ち世界萬物が理想を實現せんとする進行の途次にあるを證明するものなり、吾人々類は單に無意識的に進化の法則に支配せらるゝのみならず、

又能く進化の法則を理解し、進化すべく、退化すべからざることを領悟し、有意識的に即ち自覺的に進化發展せんことを企圖し、以て造化の工を助長し、宇宙の化を改更し、以て千古鑿空の舉に出づるを得る者なり、然れども其端緒を言へば、理想を實現するの一事にありて存す、此の如くなれば、理想は人生の根柢、萬事の樞紐といふも不可なかるべきなり、假令ひ世界及び人生に關する哲理に就いては、見解の一致し難きものありとするも、理想を實現して、德性を涵養し、人格を高尚にするの一事に至りては一致せざらんとするも能はざる所なり、理想教は、理想を實現するを以て人生の目的となす、然るに理想は絶對無限のものなるが故に、一切特殊の宗教を融合調和して綽々然として餘裕あるものなり、今や交通機關の著しく發達せるが爲め、世界各國民次第に相接近し來たり、漸く世界的社會を組織し始めたり、是に至りて四海一家五洲同族も殆んど陳言たらんとす、時勢境遇の變遷亦甚しからずや、然るに宗教は依然として舊態を存し、佛教は佛教、基督教は基督教、各〻其歷史的特殊性に執着し、自尊排他を事とし、反目疾視、以て其頑冥固陋を自覺せざるの狀、眞に憫むべしとなす、宗教の異同に伴ふて人種的嫉惡Rassenhassの念も、亦隱然侮るべからざる勢力を有することと疑なし、是れを人道の振起すべき前途に於ける一大障碍となすなり、進化の法則が認容すべきものならば、宗教も亦進化せざるべからず、時勢境遇が斯くまで變遷せるに、獨り宗教のみ依然として舊態を有し得べきものにあらず、其舊態を存し得べからざる破綻は種々なる眼前の事實に於て暴露されつゝあるなり、佛教といはず、基督教といはず、皆百回千回新規の時勢境遇を迎合して、調停應化を圖りたる後にして、今や復た之れを奈何ともすることと能はざるに至れり、故に、已に業に其形骸を後に遺して、精神は他處に移轉するの傾向あり、宗教は蟬の如く變形するものなり、宗教其物の何たるかを知らざるものは、猶ほ佛教若くは基督教の形躰を執へて、此れを以て唯一の宗教とせり、何ぞ知らん、是れ蟬の空殼を以て生ける蟬と誤認するものに異ならざるを、佛教若くは基督教は之れを婆羅門教

若くは猶太教に比すれば、普遍的なりと雖も、今後の世界的社會を導き得る程に普遍的ならず、寧ろ世界的社會の組織を沮害するものとなれり、理想教は然らず、世界的社會の組織を催進し、人種の異同に拘らず、一切人類の共同的進化發展を期する者なり、故に理想教は、佛教若くは基督教等を接合補綴せしが如き折衷的揑造の結果に出づるものにあらず、但歴史的特殊性に拘泥するの弊を一掃して、將成の理想中に一切特殊の宗教を包攝せんとするものなり、理想教は何人の宗教といふべきものにあらず、人類一般の宗教なり、理想てふもの、人類自然の必要に出づるものにして、何人も能く私すべきものにあらざるなり、若し宗教を、佛教、若くは基督教に限らしめば、是れ釋迦若くは基督をして宗教を私せしむるなり、宗教は人類一般の精神的産物なり、豈に釋迦若くは基督の私すべき所ならんや、釋迦若くは基督は固より宗教を私するの意ありとも思はれず、然るに宗教といへば、必ず佛教若くは基督教を擧げ、是れ以外に宗教なきが如くに思惟するが如きは獨り宗教の形躰を

のみ知りて、宗教の精神を知らざるに坐するのみ、

第八章　結論

宗教の將來を論ずるに當りて最も便宜多きは我日本に若くはなかるべし、儒教若くは佛教の得失を言ふも、各自の自由なり、又基督教の利害を言ふも、亦各自の自由なり、歐米諸國にありては、卓識の學者と雖も、敢て基督教の利害を言ふを恐るゝが如し、彼等の境遇、洵に憫むべしとなす、唯我日本に於ては固より寸毫も憚る所なきなり、故に基督教が廣く世界各地方に傳播せりといふと雖も、其空前絶後の批評に遭遇すべきは、我日本なること疑なきなり、思ふに佛教も基督教も共に其全盛の時代を經過せり、猶ほ花の滿開を過ぎて漸く凋衰せんとするが如し、基督教國の人或は論じて曰く「佛教は已に其繁榮を遂げ了はれり、獨り基督教のみは未だ其繁榮を遂げ了はらざるなり」と、蓋し是れ自己の宗教に媚びるの甚だしきものなり、基督教は廣く世界に傳播すと雖も、反りて歐羅巴の中心に於て著しく其勢力を失へり、乃ち其全盛の時代を經過せること推して知るべきなり、理想教は過去の事蹟を有せずして、唯將來成の希望を有するものなり、其全盛の時代は未來永遠にあるなり、一切特殊の宗教を統一し、世界的社會の組織を催進する主義となりて今後の人類を指導すべきものなり、此の如く精神界に於て絶大の經營を成すものにあらざるよりは、以て新宗教となすに足らざるなり、蓋し個人にして理想を實現するの念なければ、動物的生命はあれども、精神的生命はなきなり、精神的生命なきものゝ如きは、是れ滔々として醉生夢死するものに過ぎざるなり、但未來永遠に理想を實現して已まざるの活氣あれば、乃ち精神的生命を生じ、動物的生命を超絶して、未來永遠に盡きざるの勢力あり、然るに國民も亦然り、國民の理想は單に物質上に止まるべきにあらず、更に之れを超絶して精神上に及ばざるべからず、我日本の如き、今や漸く精神上に於て何等か得る所あらんとして未だ得ざるの狀あり、是に於てか理想教は國民としての精神上の理想を付與するものなり、理想教の如き精神上の理想を實現せんことを企圖せば、

其勢力未來永遠に洋の東西に普及せんとと期して竢つべきなり兵力の如きは其れ自身に國民の目的たるにあらずして理想を實現するに當りて總べて前途の障碍を除去するに必要なるものなり方今東亜諸國は項背相望み爭ひ來たりて教を我邦に請はんとす而して歐米諸國とは交際益〻親密なり是れ國民として理想を實現する爲めに眞に天與の時機なりといふべきなり、

附錄

宗教の將來に關する意見

一　叙論

凡そ宗教は其何たるを問はず、苟も生命を有し、幾多の生靈を支配する以上は、必す深遠なる旨趣なくんばあらず、殊に聖人の垂示せる教訓を本として起り、千百年の久しきを經て、尚ほ光輝を放つもの、豈に其因由なかるべけんや、然るに聖人の教訓にして相互に一致せば、何等の困難も、其間に存せざるべきも、彼れと此れと必ずしも合一せず、遂に聖權authority の異同を來たせり、種々なる宗教の併存して相容れざるもの、此に起因せずと云ふことなし、然るに是等の宗教は將來如何樣になるべきか、余頃ろ此事に關して少しく見る所あり、因りて聊か其要點を叙述せんと欲す、然れども宗教の事たる、其關する所極めて廣大なるが故に

先づ我日本國内の事として之れを論ぜん、然れども其歸着する所は固より宗教全躰に關係なしとせざるなり、

二　現今の宗教の情態

宗教の將來を論ずるに先ちて、之れが現今の情態を考察するを要す、現今の情態は、隱然將來の傾向を指示するものなればなり、今我邦に存する宗教を算へ來たれば、四種あり、儒教、佛教、基督教、神道、是れなり、儒教は固より宗教と稱し難きも、其形式は宗教と異ならず、故に姑く之れを宗教として論ずるものなり、

一、儒教……德川時代に盛況を呈したる儒教も維新以後頓に勢力を失ひ、今日に至りて其衰運殊に甚しとなす、抑〻宗教は人によりて存するものなり、然るに方今の儒者中道を以て自ら任ずるもの、果して幾人かある、僅に二三衰殘の老儒ありと雖も、眞に日暮れ路遠しの感なくんばあらず、吾人いかんして此の如き老儒に重大の希望を屬するを得んや、然らば年少氣鋭の徒にして之れに繼いで起るものあるかと翹望すれば、幾んど隻影だも認むること能はず、果して此の如くなれば、儒教は已に其末期に際せりと謂ふべし、後來儒教が再び勢力を挽回して我邦の精神界を席卷せんが如きは思ひも寄らざることなり、

二、佛教……次ぎに佛教はいかんと問ふに、是れ亦單に殘骸を留むるのみ、其狀眞に氣息奄々として死に瀕するが如し、佛教の我邦に起れるは其人によりて起れり、聖德太子及び空海、最澄の如き、法然、親鸞、日蓮の如き、皆佛門の龍象にして、佛教の氣燄は、是等の人によりて揚れり、然るに德川時代に至りて、大に其精神を失ひ、維新以後に至りては全く文明の背後に遺され、其勢力の衰退は言ふまでもなく、將に殘餘の生命をも併せて之れを亡はんとするの狀あり、而して之れを挽回せんには遂に其人なし、近時佛教界の消息と云へば、一として其頽敗に關することにあらざるはなし、大家一傾とは佛教今日の有樣を謂ふなり、佛教が活動せる社會の中心に勢力を占めんこと、落日を中天に返すより難しと知るべきなり、

三、基督教……次ぎに基督教の狀況を瞥見するに、是れ亦萎微振はず、曾て一たび我國の精神界を風靡せんとするの勢ありしも、俄然として厥角を崩し、進ず退尺、遂に社會の一隅に蹐蹐し、自家撞着の疑惑中に苦悶しつゝあるなり、基督教が歐米諸國に於けるが如く、我邦一般の宗教とならんことは、到底望みなきなり、基督教が意氣沮喪するに至りしは、偶然なる一時の出來事にあらず、深遠なる旨趣の其中に存するものあるなり、基督教が一旦退歩したるは永遠に退歩したるなり、

四、神道……次ぎに神道の現狀を考察するに、俗神道は多くは迷信のみ、固より言ふに足らず、然れども我民族の祖先教としては潛伏せる偉大の勢力あるを見る、然れども世の識者は之れを宗教以外に置くの得策たるを主張し、神道家自らも之れを可として其方針を取るに至れり、故に神道が宗教としての勢力は、次第に消滅するを免れざるべきなり、上來叙述せるが如く我邦に於ける宗教は何れも凋衰廢滅に迫まれるものにて、將來永く我民族の精神界を支配するに足るもの一もあるなし、是れ我邦に於ける宗教の現狀なることは、眼前の事實、證して餘あるなり、

三　教育界に於ける目下の缺陷

我邦に於ける諸宗教は皆衰退しつゝあるが故に、國民教育に何等の勢力をも及ぼすこと能はず、國民教育が總べて宗教を離れて、自ら其範圍を成すこと、固より當然のことにて、我國民の遂行せる一進歩たるや、疑なし、今其理由の如何を論ずるに遑あらずと雖も、兎に角教育と宗教とは、必ず分離すべきものにて、決して兩者を混同すべからず、一たび宗教と分離せる國民教育は永遠に其然るべきことを期すべきものなり、然るに吾人は教育界に於て分明に一の缺陷あることを認識す、請ふ少しく其何たるかを論ぜしめよ、我邦に於ける過去の教育は儒教と佛教とに外ならず、此二教は何れも古代より傳承せる聖權 authority によりて立ち、斯くすべし、斯くすべからずと命令的に教訓を施せり、而して人をして之れを信じ、之れに從ひ、之れを行はしむべき効力を有せり、然るに

維新以來西洋の學術を輸入するに及んで、何人も總べて過去の學術を陳套なりとして、之れを脱ひ、殊に命令的の教訓の如きは、殆んど冷笑に付し去らんとす、是れ其一たび經過せざるべからざる情態にて、固より怪むに足らざるなり、然れども漸く歳月を積み、益〻其方向に進むに隨ひ、素より相期せざるも、遂に相共に奇異なる缺陷あるとを自覺するに至れり、何ぞや、智育は、德川時代に超過して、著しく進歩せるに拘はらず、德育は之れに伴はず、啻に之れに伴はずといふべきのみならず、反りて、次第に退歩し、寧ろ德川時代に劣れるが如き看あるとは、是れなり、識者或は此に見るありて、德育の怠るべからざるとを云云し、漸く德育を重んずるの傾向を生じ、東隅西陲、倫理を講ぜざる學校一も之れあらざるとなきに至れり、然れども德育の遂に振はざるは、何ぞや、智育を受けたるもの、毫も命令的の教訓を信ずると能はず、是を以て倫理學を講じて、之れに理窟を教ふるとゝなれり、是に於てか德育愈〻委して揚らず、倫理學は道德的行爲を對象として成立せる學科にして、自然科學とは其規範的たるの一點に於て區別すべきも、其識知的の科學たるに至りては一なり、倫理上の事項は、倫理學によりて學び得べきも、唯〻學び得たるのみにては、未だ必ずしも行とならず、人をして其學び得たる所を行はしむべき動機は、認識にあらず、認識を超絶する先天内容のものたり、然るに識知的の學科たる倫理學によりて德育を施さんとするは、唯〻美術の事項を了解さへすれば、美術は自ら成るものと思惟するが如く、其惑や眞に及ぶべからずと謂ふべきなり、西洋各國にありては、佛蘭西と瑞西とを除くの外は、尚ほ基督教を教育上に取れり、是故に基督教は如何に勢力を失へりとするも、今に彼國に於ける德育の根底をなせるや疑なし、然るに我邦に於ては、彼國のあらゆる識知的の學科を輸入せしも、獨り基督教をば取らず、是を以て唯〻識知的の學科に於ては、進歩の著しきものあるも、德育は之れに伴ふとと能はざるなり、之れを要するに、已に儒教と佛教とを捨て、又基督教をも取らず、是に於てか教育上に一の缺陷を生ぜり、換言すれば、人をして行はしむべき德育の基本を失へり、然らば基

督教を取らんか、將た又儒教若くは佛教を興さんか、是れ今日教育界の進路に横はれる一大疑問と謂はざるべからざるなり、

四　各宗教の長處短處

今試に各宗教を比較考察するに、誠に一長一短、是非の定め難きものあり、然れども實際上より看來たれば、利害の甚だ明晰なるものなしとせず、今左に其要點を擧げて之れを論ぜん、

第一、佛教……先づ佛教の長處いかんと問ふに、(一)佛教が我邦に傳播して、已に千有餘年の久しきを經過せしといふことは、無論其長處の一なりと謂ふを得べし、佛教は本と外國より輸入せしものなれども、最早今日となりては、何人も外國の宗教といふ觀念を抱かずして、寧ろ我邦の宗教なりと思惟せり、此の如く佛教が我邦人に嫁して全く馴致し了り、深く其根柢を此に扶植し得たるは、其精神上に於て既得權を有する所以なり、(二)次ぎに佛教の長處と見るべきは、其理窟に富めることなり、固より無數の奇怪なる說話をも混入すれども、又其精微なる理論と、高尚なる觀念とに至りては純正哲學を成すに足るものにして、區々たる塵世の疑惑を解答して、眞に痛快なるものあるなり、然れども又佛教に短處あり、(一)佛教は其旨意茫漠として理會し難し、是れ其宗教として甚だ不利なる所以なり、佛教は如何にして了解し得べきか、其旨意は載せて藏經にありといはん、藏經は幾んど一萬卷になん〳〵とする大部の書にして、之れを通讀することを普通の人に希望するも、其出來得べからざるは言ふまでもなし、又假令ひ藏經を讀了するも、藏經外の佛書、果して其幾萬なるを知らざるが故に、未だ佛教の旨意を明め得たりと謂ふを得ず、其實佛教は何人も一生涯に明め得べき性質のものにあらざるなり、此の如くなれば、佛教の不便、亦甚だしと謂はざるべけんや、(二)然れども佛教の短處は更に之れより甚だしきものあり、何ぞや、佛教は微頭徹尾厭世教にして悲觀的の主義によりて立てり、佛教徒は動もすれば輙ち佛教の厭世教ならざることを辨ずと雖も佛教の厭世教なることは到底否定するを得ず、佛教の厭世教なるとは、啻に釋迦彼れ自身の

事蹟に徴すべきのみならず、又經論の妙は此世界の迷妄にして苦痛多く、人生の眞に皆有的なるを示す處にあり、佛教は此の如く厭世的の宗教なるが故に社會の發達進歩と相背馳せざるを得ざるなり、(三)其他尚ほ佛教の短處として算ふべきは、其禁慾主義なるにあり、抑人的情欲は一たび之れを放てば、其際限を知らざるものにて、凡そ想像すべき弊害は、皆此れより起るものなり、故に之れを抑制して、其度を持たざるべからず、然るに情欲の弊害を恐れて肉欲屬殺 Kasteiungen を行ひ、悉く情欲を殄滅せんとするは所謂角を矯めて牛を殺すものなり、人が人たる間は、情欲なきこと能はず、其情欲あるは其人たる所以なり、是故に情欲は殄滅すべからず、唯之れを制限して人道に合すべきなり、然るに釋迦彼れ自身は妻子眷族の緣を斷ち、全く獨身となりて、自家の教を開示せり、此の如く妻子眷族の緣を斷つことは後世の模範とすべき所にあらざるなり、佛教は畢竟生々榮々の路を杜絶して、死々滅々の域に導くの教なり、

第二、基督教……然らば基督教はいかんと問ふに、是れ亦其長處なきにあらず、(一)基督教が西洋文明國の宗教なることが其長處の一なることは疑なし、我邦人が上下擧りて西洋の文物を輸入し、一に西洋を崇拜する矢さきに當りて、基督教は西洋各國の宗教にして、實に彼國に於ける德育の根柢たることを說かば、順風に帆を揚ぐるの勢なくんばあらざるなり、(二)然れども吾人は基督教に於て尚ほ是れより大なる長處を發見す、是れ他にあらず、其理會しやすきことなり、基督教の教義及び歷史等に通曉せんことは勿論しかく容易なりとはいはず、然れども基督教の本旨は福音書 Evangelien にあり、福音書は僅々四卷の小冊子にして、之れを理會すること困難ならず、殊に邦文にも譯され居ることなれば、何人も基督教の源泉に接して之れを知るを得べし、何れにせよ、基督教の要旨を會得せんことは、之れを佛教に比すれば、適に易々たりと謂ふべし、是れ其社會一般に普及しやすき所以なり、(三)基督教も頗る厭世的の處あり、恐くば、猶太教よりは一層厭世的ならん、然れども佛教の如く甚

しからず、而して禁慾主義に至りては佛教の到底及び難きものあり、基督は一夫一婦の教を立てたり、即ち情欲を絶滅せんとするにあらずして情欲を制限するの法を立てゝ、後人をして人倫を正うする所以の道を知らしめたり、然れども又基督教に短處なきにあらず、(一)基督教は人格的の神ありて意志を有し、人事界に干渉するものとせり、此の如き思想は到底今日の科學と相容るゝこと能はず、科學は唯、原因結果の關係をのみ認定し、此れを外にして別に不思議の出來事あることを是定せざれば、なり、基督教が西洋に於て科學の進歩と逆行して日に月に衰退の狀を呈する所以のもの實に此にありて存するなり、(二)基督教は又我邦に於て一種特異の困難に遭遇するを免れず、我民族の生榮は其古代より傳承せる祖先教の精神によりて催進されつゝあるなり、基督教は其唯一神の信仰によりて我民族の精神に敵抗せんとす、唯一神は專政の君主の如く、同等の有權者を容るゝこと能はず、況んや之れに優るものをや、是故に我民族にして基督教を取らば、忽ち自家撞着に陷るを免れず、我民族が生榮する限りは、基督教は決して我邦に勢力を逞うすること能はず、要するに我民族の生榮と基督教の主義とは永遠に其衝突を免れざるべきなり、

第三、儒教……然らば儒教はいかんと問ふに、是れ亦多少の長處あり、(一)先づ其怪誕なることは最も注意を惹く所なり、佛教にせよ、基督教にせよ、神怪不思議の說話多く、到底迷信を脫却すること能はず、然るに儒教は元來此の如き迷信を混入せず、孔子自ら一切怪誕なることを拒絕し、敢て妄りに臆測によりて之れを論ぜざりき、是を以て儒教は斷々乎として他の宗教に優れる一性質を得るに至れり、(二)又儒教が世間的なることは、其顯著なる長處と謂ふを得べし、儒教の說く所の毫も幽冥界に關するにあらずして、各自平生の行爲に關することなり、是故に其實際に適切なるは言ふまでもなし、若し又孔子彼れ自身に就いて之れを考察せば、尙ほ一層明瞭ならんか、孔子は世間的の家族を成せり、釋迦の如く妻子眷族を捨てたるにあらず、又耶蘇の如く獨身ものにあらず、一家

の父として即ち親族の關係を有して此の如くにして其教を千歲の下に垂れたり孔子の性質の溫厚にして威ある處正うして缺點なき處誠に教育家の模範たりと謂ふべし(三)若し又其舊きとをいへば佛教よりも舊し曾に佛教より舊きのみならず又佛教よりは我邦の人情に調和し易し是を以て儒教が儒教としては最早何等の勢力もなきが如きも其精神は隱然普及して尙ほ多少の生命を有すると決して否定すべからざるなり然れども儒教も亦短處あり(一)儒教は個人的倫理即ち私德を說くに於ては甚だ適切なるものありと雖も本と公共的の精神に乏しく國家若くは民族の生榮發達上より見たる所の倫理を說かず約して之れを言へば社會的倫理に於て缺くる所あるなり其君臣父子夫婦兄弟朋友の關係を說くが如きは固より社會的倫理の始めなりと雖も唯其始めに止まりて社會に對する德義の大なるものに及ばず例へば義勇奉公の如き公義公德に至りては殆んど後人の學ぶべきものなきなり支那人が國民として團結すべき所以の要を知らざるもの一は此に起因せずんばあらざるなり(二)然るに儒教は尙ほ他の短處あり儒教は探究的精神に乏し即ち斯くせよ斯くする勿れと教へ示せども識知的探究を奬勵せず曾に識知的探究を奬勵せざるのみならず反りて之れを貶黜せり例へば醫學數學及び動植物の學の如き皆百家の學として賤視せざるはなし是を以て其發達は比較的に遲々たるを免れざりき朱子の如きは稍探究の要を知るが如きも概して之れを言へば儒教は倫理的修錬を主として探究的精神に乏しきものなり此點より之れを論ずれば儒教は人をして迂濶に流れしむるの弊を免れざるなり(三)次ぎに尙ほ看過すべからざる短處あり何ぞや儒教が弱國の教たること是れなり我邦人が支那に打勝ち支那を劣等なりと思惟し今や西洋と同化せんとしつゝある時なるが故に總べて西洋のものは貴重せられ支那のものは賤蔑せらる是れ實に滔々たる世の風潮なるが故に支那に淵源せる儒教も此影響を免るゝこと能はず固より儒教の眞價は之れが爲めに減ずべしとも思はれざれども漢學の退歩と共に儒教も

亦必ず其勢力を失はざるを得ず、是れ亦儒教に屬する一の短處と見るを得べきなり、

此の如く各宗教を比較對照し來たれば、何れも長處あり、又短處あり、絶對的に我邦に利ありといふべきもの、一も之れあることなし、吾人が又如何に是等の宗教を信ぜんとするも、一も吾人の世界及び人生觀として、滿足し得べきものあらず、固より何れの宗教にも多少取るべきものあるは言ふまでもなけれども、何れか唯一の宗教を奉じて吾人信念の全部を繫がんこと斷じて能くすべからずと謂ふべきなり、何れの宗教も此の如く不完全なるが故に、取りて以て我教育界の缺陷を充たすこと能はざるなり、若し强ひて是等の宗教を我教育界に採用せんとせば、其弊害の甚しき、殆んど復た救ふべからざるものあらんとするを知るべきなり、

五　各宗教の根柢に於ける契合點

儒教と云ひ、佛教と云ひ、基督教と云ひ、凡そ是等の諸宗教は、其歷史を異にして、發達し來たれるを以て、何れも其特殊の性質を有せざるはなし、是を以て其徒動もすれば輙ち相排擠せんとす、局外より之れを觀れば、其我れを是として彼れを非とするの一點に至りては、毫も異なることなきなり、若し彼等にして一たび諸宗教の根柢に於ける契合點を看破するを得ば、彼等の迷妄は忽ち夢の醒めたるが如くに消散し、心境恍惚として縹渺たる別世界を瞥見するを得ん、抑諸宗教が如何にして起りしかと云ふ史的考察は姑く之を置き、今の諸宗教は現に如何なる根柢を有するか、換言すれば、何等の基礎によりて成立せるか、此點に就いて吾人の考察を要するものあり、吾人の見る所によれば、今の諸宗教は皆實在の觀念を根柢とす、若し實在の觀念なからんか、何れの宗教も忽ち意味なきものとなるなり、要するに、今の諸宗教が如何に相互に異なりとするも、其實在の觀念を本として建設され居るといふ一點に至りては一なり、初め思へば、實在の觀念は、それ〳〵の宗教に隨つて非常に異なるが如きも、漸く思へば、其實甚だ相近きを覺え、遂に其一致するも

のあるを領悟するに至らん、實在其れ自身は、言語を以て形容し得らるべきものにあらず、又文字を以て叙述し得らるべきものにあらず、眞に依心傳心のものたり、然れども是れ實に世界及び人生觀の極處にして一切の道義畢竟此に淵源するが故に、如何樣にしてか之れを言語と文字に表はさゞるべからず、表はし得べからざるものを、強ひて表はさんとす、故に各、其見る所によりて唯、僅に近似せる觀念を言語と文字に表はせり、故に言語と文字に表はされたる實在は種々なり、然れども何れも實在の觀念を有して此に至れるなり、寫象の特殊なるは、其人の偶然の境遇然らしめたるものにて、實在其れ自身の異同を指示するにあらざるなり、實在は一なり、唯之れが觀念を得るもの樣々に言ひ表せるのみ、實在の觀念如何に數多なるも、包攝して之れを約すれば、分ちて三種となすを得べし、即ち左の如し、

第一、人格的 persönlich

第二、萬有的 pantheistisch

第三、倫理的 ethisch

凡そ人は如何なる事に關しても、己れを標準として推測するの傾向を有するを以て世界の實在をも人格的に寫象せり、(一)婆羅門教にありては實在を梵天と名づけ、之れを二樣に寫象し、一を「ブラフマ」といひ、一を「ブラフマン」といへり、其「ブラフマ」といふは人格的の梵天にして其「ブラフマン」といふは無人格的の梵天なり、即ち前者は個體を成せる神靈として寫象する所のものにして、差、具體的の性質を帶び、後者は萬有的の本體として寫象する所のものにして、全く抽象的なり、婆羅門教の哲學にいふ所の梵天は後者を意味す、故に梵天を高等梵天 parambrahma と劣等梵天 aparam brahma とに分ち、兩者の區別を明かにせり、(二)佛教にありても甚だ婆羅門教に類似するものあり、實在を人格的に寫象して之れを但他揭多 Tathâgata 即ち如來と稱し、又萬有的に寫象して眞如 Tathatva とす、即ち世界の實相なり、如來は啻に人格的に寫象せらるゝのみならず、又此階級を超過して神人同形的 Anthropomorphisch に寫象し、遂に之れ

を物象に表現するに至れり、(三)基督教にありては、實在を人格的に寫象し、所謂「ゴット」は個體を成し、意志を有し、冥々の中にありて人類の禍福を左右するものとせり、但實在を萬有的に寫象することは、基督教の精神にあらず、固より哲學の方面にありては、デオルダノ、ブルノー、スピノザ諸氏の如く、純然たる萬有神教を主張するものなきにあらざるも、基督教は決して然らず、基督教にありては、實在は到底人格的たらざるを得ざるなり、猶太教も此點に於ては基督教と異なることなきなり、

(四)儒教にありては、實在を人格的に寫象すること、古代より之れあり、經書の中に天帝といひ、上帝といひ、又單に天といふもの、皆意志を有せる個躰にして人事界の事に干渉し得るものとして寫象せらる、今一々證據を擧ぐるに遑あらざるも、其事已に明瞭なりと謂ふべし、然るに又實在を萬有的に寫象することもあり、即ち易に所謂太極は世界の本躰にして一切現象の因りて生ずる所なり、然れども一切現象は遂に太極を離るゝこと能はざるものなり、

此れに因りて之れを觀れば、實在を人格的に寫象するの一點に至りては、各宗教共に一致せり、但萬有的に之れを寫象することは、婆羅門教、佛教及び儒教に共通なるも、獨り基督教は例外に屬す、已に此事實を明晰にしたる以上は、更に之れに就いて論述すべきことあり、何ぞや、實在を人格的に寫象するは未だ高尚なる哲理を了解すること能はざる幼稚なるものゝ事にして、到底智識の發達に伴ひ難し、何んとなれば、人格的の觀念は普に種々なる迷信を惹起するの傾向を免れざるのみならず、又到底通るべからざる論理上の困難に遭遇するを免れず、今其重要なる點を擧げんに、

第一、人格的の實在は必ず個躰を成さゞるべからず、若し個躰を成さずとすれば、是れ固より人格的と謂ふべきものにあらず、是故に人格的の實在は必ず個躰を成すものなり、然らば其個躰は、如何なる個躰なるか、吾人が通常個躰と稱するものは、皆形躰を有するものなり、然れども人格的の實在に形躰ありとは思惟すべからず、是故に唯抽象

的に寫象して是れを一個の精神と謂はざるべからず、然れども吾人の經驗によれば精神は唯形躰に付して存するのみ、形躰を離れて獨り精神のみ存立すべきことは何によりて證明すべきか、何等の證明もなくして單に假定するが如きは、其人の想像に過ぎず、固より眞理と謂ふべきものにあらざるなり、

第二、凡そ世界の現象は、悉く因果律Gesetz der Causalität に規定せられ、一も原因結果の關係を免るゝこと能はず、是を以て世界の中には妖怪なきなり、人の以て妖怪とすることはあらん、然れども是れ必ず何等か物理的の解釋あるべきものなり、一切の科學は實に因果律を基礎として成立せるものにて、寸毫も之れが一般性を無効ならしむるものあらば、吾人の世界觀は忽ち其確實性を失はざるを得ざるなり、然るに、人格的の實在は、其意志によりて、人事を左右し、物理的進行physische Vorgänge 以外に又虚外の原因をなすものなり、故に今日の科學的思想と相容るゝこと能はざるなり、

第三、人格的の實在が個躰をなす以上は、其位置Localität なかるべからず、乃ち問はん、此の如き實在は世界の如何なる處にかある、世界の內か、將た又世界の外か、兎に角世界と同一躰ならざるが故に、其位置なかるべからず、精神は空間性を超絶すとするも、人の精神は人の頭腦中にあり、此の如く人以外の精神も其居る所の場所なきを得ず、然れども是れ到底確定し得べき所にあらざるなり、

人格的の實在は今の諸宗教の契合點なるも、此の如き困難あるが故に最早維持すること能はず、假令ひ如何樣に辯護するも、今日の科學と之れを調和せんこと、毫も希望なしと謂ふべきなり、事情已に此の如くなる以上は今の諸宗教が尙ほ多少の生命を有するもの、其實在の人格的なるにあらずして、他に之れが効驗性を支持するものなかるべからざるなり、

然らば萬有的の實在は如何、婆羅門教、佛教及び儒教にありては、今に至りて萬有的實在を說けども、基督教にありては、萬有的實在を說くこと

は其本來の面目にあらず、故に基督教の價値は毫も此にあらざるを斷言するを得べし、又婆羅門教、佛教及び儒教に說く所の萬有的實在の觀念は哲學史上甚だ有趣的の事實なれども、其宗教として効力ある所以のもの、蓋し此にあらざるなり、萬有的實在を說くときは、必ず廣き經驗世界に就きて百般の證明を擧げ、其此の如き本躰あることを推論せざるべからず、此の如くなれば、寧ろ是れ哲學にして、宗教の本領にあらず、固より萬有的實在の觀念は頗る宗教の教義を支持するの力あるべきも、是れ決して宗教に必須なるものにあらず、故に基督教と猶太教とは之れなくして宗教たるを得るなり、之れを要するに、今の諸宗教が尙ほ多少の生命を有するもの、毫も其萬有的實在の觀念にありと見做すを得ざるなり、而して其契合點の此にあらざるは、基督教と猶太教とが例外たるを以て知るべきなり、

吾人は是より倫理的の實在に就いて考察する所あらん、(一)婆羅門教にありては、梵天と個人とは離るべからざる相互の關係を有せり、啻に相互の關係を有すといふのみならず、其實彼れも此れも一躰にして區別なきものなり、梵天は此世界の實在なり、然るに梵天は我身にあり、若し迷妄を打破して我れを顧みれば、我精神は即ち梵天なり、是故に我精神を指して「是れ即ち汝なり」tat tvam asi といひ、又「我れ即ち汝なり」aham brahmasi といへり、此の如く己れが精神の梵天たることを認識して之れと合一するを解脫とす、是故に人の迷悟は唯此內にある梵天を認識すると然らざるとにあり、要するに、婆羅門は實在を內容的 immanent に把捉し、人生一切の事は此れによりて左右すべきものとせり、此點より之れを言へば、之れを倫理的實在と稱するも不可なかるべきなり、(二)佛教にありては、如來は抽象的に之れを言へば、如實相にして、世界の實在なれども、又各自の精神にあり、千人あれば千の如來あり、萬人あれば萬の如來あり、猶ほ一痕の月の萬水に映ずるが如し、其人各佛性ありとするもの、此れに外ならず、歷史的の如來は已に過ぎ去れり、哲理的の如來には去來今なし、今茲に各自の內に光を放ちて存するもの、之れを如來

となす、如來を外に求むるは、俗人の所爲なり、如來は我方寸の中に認むべきもの、是れ現象の方面より見來たれば數多あるが如きも、其實唯一なり、所謂萬法一如、是れなり、個躰主義 principium individuationis を超絶して、唯一躰の如來あり、是れ各自の內部に於て眞我として認むる所のものたり、此の如き我內界に於ける如來は一切作法の樞紐なり、是故に之れを倫理的實在と稱するも、何の不可か之れあらん、(三)基督教にありては實在を我方寸の中にありとせり、所謂天國胸にありとは、實在は外界に求むべからざるを意味するにあらずや、四福音書の中にても殊に約翰傳は內容的の旨趣を言ひ表はすこと分明なり、例へば、其「我れ我父の中にあり、而して爾我れにあり、而して我れ爾にあり」 ἐγὼ ἐν τῷ πατρί μου, καὶ ὑμεῖς ἐν ἐμοί, κἀγὼ ἐν ὑμῖν とふが如き、實在と個人と相互に關係あるを指示せり、神を外界に求むるも得べからず、神は反りて我方寸の中にあるなり、彼の一念隱微の間に於て妙に是非するが如き感ある、是れを神の聲となす、シュラエルマーヘル ロッツェ 諸氏が良心 Gewissen を以て神と

するもの、其淵源する所なしとせざるなり、基督教にありては倫理的行爲の基礎は我方寸の中に於ける神の聲にあるなり、(四)儒教にありては、天と人とは相互に密着不離の關係を有す、天は人の父母にして人の心は即ち人にあるの天なり、天と人とは大世界と小世界の如し、故に「萬物皆備於我矣」と云へり、天は人の倫理的模範なれども、若し之れを外に求むれば漠として法り難し、若し之れを內に求むれば炯々として我方寸の中にあるなり、彼の性と云ひ、仁と云ひ、誠と云ひ、明德と云ひ、至善と云ふもの、皆人にあるの天を意味するなり、如何なる人も己れが方寸の中に天を有せざるはなし、苟も之れと合一せんと欲せば、合一し得べからざるの時なし、其「仁遠乎哉」といふは是れが爲めなり、苟も之れと合一せば即ち我本躰即ち天なり、我本躰の天なることを知りて、之れと合一すること、是れ實に孔門傳授の心法にして儒教の倫理は是れを基礎として立つものなり、(五)神道にありても、特殊の神は古代にありとするも、信仰上より之れを言へば、是れ唯我心の鏡に映寫して存するなり、即ち我

心の清淨にして汚點なき處、是れ即ち神の宿る所なり、其處に於ける敬なり、誠なり、仁なり、是れ即ち其祈る所の神なり、「冥加以「正直」爲「本」と云ひ、「須「照「正直「頂」と云ふも此事に外ならず、俗に「正直の頭に神宿る」と云ふもの誠に當れり、德川時代に至りて吉川惟足、偏無爲等神道の神を內容的に說くことを試みたり、殊に偏無爲の如きは、人天合一を說くこと、差精細なりと謂ふべきなり、

此の如く對照し考察し來たれば、如何に今の諸宗敎が差異點を有するも、根柢に於て一の契合點を有すること復た疑ふべからず、婆羅門敎と云ひ、佛敎と云ひ、基督敎と云ひ、儒敎と云ひ、皆人天合一を期するものにて、彼等が歷史的の宗敎として尙ほ多少の生命を有するは、實に此點にあるなり、抑今の諸宗敎の價値は果して那邊にあるか、其人格的實在を說くが如きは、少しく哲學思想あるものゝ、信ずる能はざる所なり、又其寓有的實在を說くが如きは、多少の興味なきにあらざるも、是れ本と哲學者の研究に讓るべきことにて、宗敎の如くいつまでも、一定の世界觀を持續するは、反りて知識の進步を障碍するの弊なしとせざるなり、唯其人天合一を說いて、論理の根柢を我方寸の中に立つるが如きは、其れをして其効用あらしむる所以なり、抑諸宗敎の價値は、實に世道人心を神補するの一點にあるなり、然るに諸宗敎は實に世道人心を神補し得べき根柢を有する者なり、但、梵天と云ひ、如來と云ひ、「ゴッド」と云ひ、天と云ふもの、其之れを寫象するの方法は、必ずしも一樣ならず、然れども其此の如き觀念を生ずる所以のものに至りては復た何等の差異あるを見ざるなり、

六　効力ある倫理的主義

人類の道德的行爲を對象とする學科を倫理學とす、倫理學は單に知ると云ふことの學科にあらずして、又行ふと云ふことの學科なり、即ち道德の何たるかを知ることを期するのみならず、又如何にせば、道德を行ひ得べきかを示すものなり、然れども倫理學は其方法如何によりては、單に知ることの學科となり得べし、實になり得べしと云ふ而已ならず、

又已になれりと云ふも不可なきなり、倫理學は人的行爲の目的及び之れに達すべき方法の學にして自然科學と同じからず、自然科學は直に自然現象を捉へて研究するものなればなり、然るに近時倫理學をも自然科學の如く、客觀法により、倫理的事實を研究する所より誤りて、倫理法Sittengesetzと自然法Naturgesetzを混同し、遂に倫理學を單に知ることの學科とならしめたり、單に知ることの學科となれる倫理學を取り、之れを宗教に代へ、以て德育を奬勵せんとするも、抑、又難いかな、道德的行爲に關する最も重要なる點は、此心の內に感ずと云ふことにあるなり、此心の內に感ずる其感じは一切道德的行爲の樞紐にして、倫理的觀念の因りて發生する所なり、此心の內に感ずることが意志を誘起し、發して一切の道德的行爲となるなり、然るに此心の內に感ずる所あるをば、侮蔑して、反りて行爲の法則を外界に求むるときは、如何に思慮を盡くすも、實行は遂に擧らざるなり、其故如何、外界の規定は、常に遁れ得べき機會あるなり、外界の規定の遁れ得べからざる時は、之れに從ふべきも、遁れ得べき時は、何等の効力もなきなり、是故に如何なる學說も、外界より歸納して確定せるものは、必ずしも此內に感ずることゝ調和せざるが故に實行上効力少くして又精神の自己充足Selbstbefriedigungを來たすこと能はず、例へば、利用主義utilitarianismの如く、利害の計校によりて行爲の法則を定むるものは、單に外界に於ける利害に誘はれ易くして、此內に感ずる所と相背馳することなきを免れず、此內に感ずる所は毫も利害得喪に關せざるものなるが故に、如何に利益は多かるべきも、必ずしも之れを快しとするものにあらざるなり、換言すれば、此內に感ずる所は一切の利害得喪を超絕するものなり、是故に若し利益を以て行爲を規定せば、其感ずる所は、其爲す所を非難して、到底自己充足を來たすこと能はざるなり、是れ其始め根本的謬見を有するが爲めなり、抑、此心の內に感ずる所は、卽ち道德の存する所なり、之れを顚倒せば、忽ち倫理的觀念を顚倒するを免れず、正邪の分るゝ所、眞に其間髮を容れずと云ふべし、此內に感ずる所は侮蔑すべからず、是れ實に先天內容の聲にして、始

めて我混沌世界に崩すものなり、一切の經驗を超絶せる平等無差別の實在界より來たるものなり、個々別々になれる小我の意志によりて起るにあらず、小我の意志に先ち、一切を融合せる無限の大我より來たるの聲なり、此大我の聲は獨在の時耳にさゝやく聲なり、夜半暗黑の裏に聞くべき聲なり、人をして恥辱若くは悔恨の念を起さしむる聲なり、此大我の聲に逆ふものは、則ち小我の聲にして、全く一個の情欲即ち私欲より來たる、大我の聲に從ふものは、善小我の聲に從ふものは、惡善惡の分るゝ所分明にして、青天白日の如く、復た疑を容るゝの餘地あるなし、若し此內に感ずる所を本として、己れが行爲を規定せば、必ず內外一致の結果を來たし、一切の外物は、己れを中心として施轉するの感なくんばあらず、此の如くなれば外界の利害得失の如きは、總べて大空を度る浮雲と異なるとなきなり、此の如くなれば己れが爲す所己れが感ずる所と調和し、始めて自己充足Selbstbefriedigungを得て寂然不動、如何なる事變に遭遇するも雲烟過眼に外ならず、外界より歸納せる倫理的規定は內外を

間隔するの弊を免れざるも、內界より發射する道德的工夫は、此の如き弊あるとなし、蓋し己れが爲せる罪惡は、己れ自ら回思すれば、白日の照すが如く、煌々として眼前に映出せざるを得ず、所謂「莫見乎隱、莫顯乎微」とは、此れ之れを謂ふなり、己れが爲せる罪惡は此の如く蔽ひ匿すべからず、假令ひ之れを蔽ひ匿すも之れを繼續せば、忽ち其行爲に撞着を生じ、一たび隱れたるもの、遂に現はれ來たらん、密室の裏にさゝやく所は、人之れを街頭に傳へ、暗黑の中に爲す所は、人之れを公衆に告げん、早晚事あるに當りて其人は朽木の如く、俄然として仆れん、善惡の盛衰、正邪の興亡、必ずしも顯然たらざるが如きも、其實佇立して俟つより速なり、是故に之れを知るとき、釐然非を改めて、收斂省察、己れが本躰に歸り、內部に於ける大我の聲により、一切己れが行爲を規定するを要す、此の如くなれば他人が己れの隱微を知ると知らざるとに拘はらず、內外一致を期し、己れが爲す所をして己れが感ずる所に合一せしめ、始めて何等の自家撞着もなく、遂に八面玲瓏の境界に達するを得ん、此に至りて眞

に鳳千仞に翔るの氣象なくんばあらず、若し內外間隔するとあらば、眞誠の道德的行爲は希望すべからず、他人は己れが隱微を知らざるべしと思惟し、他人の見聞の及ばざる處に於て不善を爲し、唯智巧によりて外面を裝飾し、法律の罅隙をくゞりて善人と見せ掛くることを務むるに至る、是れ即ち僞善者なり、此の如き僞善者の次第に增加するは全く此內に感ずる所のものゝ恐るべき勢力を有するを知らざるに由る、誠に悶むべしとなす、彼等と雖も、姑く此內に感ずる所のものに聞く所あらば、必ず異樣の苦痛なきこと能はず、小我爲す所の罪惡は大我の前に明々白々、寸毫も蔽ふべからざればなり、是故に彼等僞善者は人の己れが胸中を知らんことを恐れ、常に蔽はれたる苦痛を抱きて行動するものにて、蹐天蹐地、日に月に縮迫窮窘の狀態に陷るを免れず、是れ實に自ら推して那落の底に投ずるものなり、此の如き僞善者は知識を主とする倫理學によりて救ふこと能はず、倫理學は反りて彼等に種々なる口實を與ふるの具となるの恐れなしとせず、若し彼等にして此內に感ずる所のものに從ふべきの要を知り、翻然心を悛めて、大我と合一せば、內外の間隔之れが爲めに俄然徹せられて圓融無礙の境界に達するを得べきなり、即身成佛といひ煩惱即菩提といふは此事に外ならざるなり、先天內容の聲を本として立てたる倫理は、一切人生の暗黑面を照すの敎なり、將に來たらんとする惡魔に些の陰翳をも假さざるの敎なり、如何なる隱微の處に於ても人をして罪惡をなすに處なからしむるの敎なり、凡そ宗敎の効力あるものは、此人生唯一の鍵を執へて起れり、故に能く億萬の人心を支配し、千歲の下に影響を及ぼすを得たるなり、是故に識知を主とする倫理學の如きは、其感化力の微弱なる迚も宗敎に比較すべくもあらざるなり、是故に宗敎に常住不滅の眞理ありて之れが根柢たるを知るべきなり、常住不滅の眞理は他にあらず、先天內容の聲なり、先天內容の聲は、一切宗敎の內りて起る所なり、釋迦、此聲に呼び起されて遂に佛敎の基を立て、基督、此聲に呼び起されて遂に基督敎の源を開き、孔子、此聲に呼び起されて儒敎の始めを成せり、獨り此聲を本

とせる倫理のみ、人をして實行せしむるの効力あること火を見るより明かなり、先天内容の聲は、即ち大我の聲なり、情欲の誘發する所は小我の聲なり、小我の意念を捨てゝ、大我の目的に從ふ、之れを善となし、義となす、之れに反する、之れを不善となし、不義となす、小我は大我に比すれば消え失せんとするほど微小なり、故に小我に從ふものは眞に匹夫匹婦にして、卒々として、孤立し、暗黑より暗黑に移り、遂に滅びざるを得ず、唯大我に從ふものは其勇氣實に量るべからず、是れ無限の大我を以て眇たる小我に向ふが故なり、獅子奮迅の勢は之れが爲めにあるなり、「雖千萬人吾往矣」の勇は之れが爲めにあるなり、神の下にありては他に恐るゝ所なきの心は之れが爲めにあるなり、大我に從へば、私利私欲の爲めは蔽はるゝことなきが故に善惡邪正の差別、炳として眼前に表はれ、復た寸毫の陰翳を留めず、其心の光明は太陽と壯大を爭ふに足るものあり、是を以て古の聖人は皆此内に得る所の眞知を光明に比せり、大學に明德と云ふ、其明は即ち心の光明なり、婆羅門教にありては、梵天を光明とし、日月星辰より火に至るまで、皆梵天の光明を得て光明を發するものとせり、佛教にありては如來は即ち大光明なり、故に如來の法身を光明遍照となす、基督は自ら光明に比して我れ即ち世界の光明なり、我れに從ふものは、暗黑に行かずして生命の光明を得んといへり、又、大我に從ふものは、自己充足 Selbstbefriedigung を得、自己充足によりて得たる快樂は人生最大の快樂にして如何なる快樂も之れと匹敵すること能はず、古の聖人は小我の情欲を捨てゝ此の如き最大の快樂を得たり、扎子は利害得喪の外に悠然として樂む所あり、即ち「樂以忘憂」と云ひ、「不如樂之者」と云ふの類、皆大我と調和して、其自得する所を樂むなり、婆羅門教にありては、梵天を妙樂 Wonne とせり、吠檀多經(一、一、一〇)に「妙樂より成立する所の自己は、最上の自己なり」と云へり、佛教の極樂、基督教の天國、皆大我によりて得らるゝ所の最大の快樂を謂ふなり、是故に古の聖人の學脈は唯大我に從ふの一點にあるを知るべきなり、然るに彼等僞善者、此れを之れ知らず、唯小我に從ひて、其小智を賴み、時々刻々、危險に

近づきつゝあるなり、其狀譬者の假々乎として深淵に臨むに異ならず、一たび小我を捨てゝ大我に從はゞ夢の醒めたるが如く始めて人道の正に歸するを得べきなり、之れを要するに、先天內容の盤を本とするの倫理即ち小我を捨てゝ大我に從ふの倫理は實行上最も効力ある主義にして、諸宗教共通の點なり是故に一切宗教の形躰を離れて我教育界現今の缺陷を充たすべきものは此の如き倫理を措いて他に求むべきにあらざるなり、

七　宗教の取るべき將來の變形

今の諸宗教は何れも歷史の或る時代に於て世界の或る方處に於て特殊の狀勢によりて鎔鑄陶冶せられて起れるものにて他の時代若くは他の方處に適應すべからざる特殊性を有せざるはなし、換言すれば今の諸宗教は皆それ〴〵の歷史的關係を有するものにて世界各國に共通なる信仰となり得べきほど普遍的のものにあらず、諸宗教の信者は各〻其信ずる所を以て是正なりとすれども、局外より之れを觀れば何れにも與みすること能はざるなり、彼れと此れと其位置を變更すれば其己れを是正なりとするの精神に至りては毫も異なることなければなり、今の如く諸宗教が併存するときは假令ひ其中唯一神教のものもあれども諸宗教を合一して之れを考察すれば多神教に外ならず、即ち梵天あり、如來あり、「ゴット」あり、天帝あり、此の如く宗教界に種々なる神靈ある以上は今の宗教は多神教の姿を成せりと謂はざるを得ず、然るに若し諸宗教の根柢に於ける契合點を執へ來たらば眞正の唯一神教是に於てか始めて成立するを得べし、而して此の如き唯一神教は唯倫理的の旨趣を有するのみにて毫も人格といふものを取らざるが故に今日の哲學及び自然科學と併存して何等の撞着もあらざるなり、

又之れを考ふるに婆羅門教は本と婆羅門種族の宗教にして婆羅門種族以外に傳播すべき性質の宗教にあらず、是故に婆羅門教は民族的の宗教なり、然るに釋迦一たび出てゝ之れが革新を行ひ、一變して之れを普遍的の宗教となせり、即ち佛教是れなり、佛教は如何なる人種にも普

及し得べき性質の宗教なり、猶太教も亦婆羅門教と同じく猶太人種の宗教にして、猶太人種にあらざるものが、猶太教を信ずべき謂はれなし、然るに基督一たび出でゝ、之れが革新を行ひ、一變して之れを普遍的の宗教となせり、即ち基督教、是れなり、基督教は佛教と同じく如何なる人種にも普及し得べき性質の宗教なり、是故に佛教と基督教とは何れも普遍的の宗教なり、而して儒教も亦之れと同じく普遍的の宗教なり、然れども是れ唯一比較的に然かいふに過ぎざるなり、其故は佛教といひ、基督教といひ、儒教といひ、何れも普遍的の宗教たるに相違なきも、是等諸宗教が今日尚ほ並存ずる以上は相互に拒絶して、各己れを以て是正なりとするを免れざるが故に、何れも絶對的に普遍なるにあらず、但過去の民族的宗教よりは確かに普遍的なり、故に之れを普遍的といふは、唯一比較的に之れを言ふのみ、若し諸宗教の根柢に於ける契合點を執へ來たらば、眞に普遍なる宗教、是に於てか始めて成立するを得べきなり、因りて又世界の大勢を觀るに、一切の歷史的宗教は日に月に勢力を失ひつゝあるなり、其佛教たると、基督教たると、將た又儒教たるとを問はず、其衰退は眼前の事實にして、到底否定し得べき所にあらざるなり、如何なる豪傑ありて出で來たるも、今の諸宗教をして舊時の盛況に復せしめんこと、泰山を挾んで北海を踰ゆるより難しと謂ふべし、古今東西時勢已に易はり、境遇亦同じからず、宗教の如き亦變化なかるべからず、蓋し今の諸宗教の衰退は其變形しつゝあるを意味するなり、諸宗教の偶然に受け得たる特殊性は次第に價値を失ひつゝあるなり、然れども宗教の因りて起れる根本的の主義は本と常住不滅のものにして人類と共に存す、人類のあらん限りは寸毫の盛衰もあり得べからざるものなり、然れども宗教の形式は時處位に從ひ變遷するものにて又變遷せざるを得ざるものなり、然るに宗教の形式の衰退を見て宗教の精神も共に衰退するものとするは謬見の甚しきものなり、社會の關係、次第に密接となり、眞に世界一家の觀あるに際して、獨り宗教のみ、特殊の性質を持續するを得んや、諸宗教が歲と共に加速して其衰退を急ぎつゝあ

るは變形して他の情態とならんが爲めなり、即ち個々別々の特殊性を失ひて合一して普遍的のものとならんが爲めなり、釋迦若くは基督若くは孔子の如き特殊の聖人の教として、宗教を持續する間は、宗教は眞に普遍的となり難し、宗教は個人の關係を付して誰れの教といふべきものにあらず、宗教は常住不滅の眞理を基礎として立つべきものにして、決して個人の教にあらず、是れ實に人類の相共に認定すべき一切行爲の主義に外ならざるなり、今諸宗教の根柢に於ける契合點を取りて之れを變形せる普遍的の宗教とせば、是れ固より誰れの宗教といふことなく人類一般に共通なり、此の如くなれば、一切の宗教を融合調和して、毫も扞格する所なく、而して釋迦基督孔子等の根本的思想は自ら其中に存するを知るべきなり、

抑宗教は如何なる處にあるか、宗教は人を離れて客觀的に存するにあらず、唯一人の頭腦中にあるなり、是故に東西國民の交通、年を逐ふて頻繁なるに從ひ、諸宗教も亦入り亂れて、紛々相爭ひ、遂に融合調和を催進し、其結果として變形せる宗教の胚胎せらるべきは固より論を俟たざるなり、若し之れを歷史に徵せば、印度にありては婆羅門教と回々教と相合して「シック」と稱する宗教を胚胎し、基督教と婆羅門教と相合して「ブラモサマジ」と稱する宗教を胚胎せり、又西洋にありては、基督教と自由思想と合體して「ユニタリアン」教を產出せり、今や世界の主要なる諸宗教は、我邦に集中し、相和せんと欲して未だ全く相和すること能はず、相排せんと欲して未だ全く相排すること能はず、或は相和し、或は相排し、百度變幻、姿態窮りなく、雲蒸雨合、何等か其中より胚胎する所あらんとするの狀は識者の窺に認定する所なり、東西の列國此の如く多しと雖も、諸宗教の變形して新に其繼續者を產出せんことは我邦を以て最も適切なりとなす、唯印度に於ける諸宗教雜居の情態は我邦に似たりと雖も、彼國の宗教思想は、厭世といふ不健全なる性質を帶びざるはなし、是れ實に亡國の教にして將に大に興らんとする國民の教にあらざるなり、古來個人に就いて「健全なる精神は、健全なる身體にあり」mens sana

in corpore sano といへるが如く、國民に就いても亦然かいふべきなり、即ち我國民は健全なる體格を以て儒教、佛教、基督教の如き諸宗教を打ちて一丸となさんとして、低回顧慮、殆んど其窮迫の極に達せり、然れども滔々たる世人は左せんか右せんか多岐亡羊、唯疑念を抱くのみにして、其適從する所を知らず、殆んど暗黑中を摸捉するの狀あり、然れども未だ一人の能く其方針を示し、彼等をして相率ゐて正路に歸せしむるものあらず、是を以て我思想界は一時全く混沌となり、人々其目的の果して那邊にあるかを知らず、日夜唯五里霧中に彷徨しつゝあるなり、事狀已に此の如くなる以上は早晩何等か異變なかるべからず、之れを歷史に徵するに、古人は宗政の革新reformationといふ痕迹を遺せり、今や此事我邦に於て必要となれるにあらざるか、是れ吾人の深く考察せざるべからざる所なり、

革新といへば、何人も、ルーテル氏が革新を想起すべしと雖も、釋迦及び基督のなせる事業も亦革新に過ぎず、釋迦は婆羅門教を革新し、基督は猶太教を革新せしなり、革新は或る時代に於ては必要なり、革新なければ進む能はざる時あり、舊來の宗教、漸く形式に流れて活氣沈滯し、從ひて種々なる弊害を生じ、其極遂に人の依信を斃ぐに足らざるに至ることあり、かゝる場合にありては何等か根柢より之れを刷新すべき變動なかるべからず、釋迦といひ、基督といひ、皆其時勢の代表者となりて舊來の宗教を一變して革新の功を奏せり、然れども、彼等と雖も宗教の精神を撲滅せしにはあらず、唯宗教の形式を變更せしのみ、今や廣き世界に於ても宗教の形式を如何にか變更すべき時機に際せるが如し、歐米諸國に倫理的修錬ethical cultureの結社起れるが如き即ち其徵候と見るを得べし、然れども、我邦に於て革新の時機は一層切迫せるを覺ゆ、種々なる宗教ありて併存し、各其信條を說いて民心を四分五裂するの傾向あり、我邦の思想界は到底之れに堪ふること能はずして遂に融合調和の擧に出でざるを得ざるなり、即ち諸宗教は變形して合一し、唯一の普遍的宗教とならんこと豫想し難しとせざるなり、

抑宗教の本躰は人類の行爲を規定する主義にして實踐倫理の根本主義と異なることなきものなり、此の如き宗教の本躰は常住不滅なり、廣大無邊なり、人事界一切の關鍵なり、之れを宗教と名づくること、未だ必ずしも當れりと謂ふを得ず、宗教といふ名は畢に曖昧なるを免れざるのみならず、又餘りに狹小に過ぐ、宗教の本躰は宗教といふ名の指示するより遙に宏壯遠大なるものなり、吾人は普通に婆羅門教、佛教、猶太教、基督教、回々教等を宗教と稱すれども、其實是等の宗教と程度は異なるも、性質は同じきもの、それより以前にありたり、宗教といふ名は宗教の原始的形式たる一切の崇拜を蔽ふに足らず、實に宗教といふ名は古今を連貫して萬古不滅なる人類行爲の根本主義の或る時代に取れる特殊の形式を謂ふなり、此の如き根本主義を總稱するの名としては餘りに狹小に過ぐるを免れざるなり、宗教が舊來の歷史的特殊性を脫却して、一旦變形し、今日の時勢に適應すべき合理的のものとならんか、最早單に之れを宗教と稱するを得ざるべし、或は倫理的宗教といふべきか、將た宗教的倫理といふべきか、或は又全く他の名稱を付すべきか、吾人は未だ何等の名稱を以て最も適當とすべきかを知らず、何れにせよ宗教といふ名の餘りに狹小にして今後其變形せるものを蔽ふこと能はざるを知る、然れども別に他の適當の名稱を發見すること能はざるが故に姑く宗教の名を假用するに過ぎざるなり、兎に角宗教の歷史的特殊性は一日も早く打破すべきものなり、之れを打破し了らざれば其變形せる普遍的の宗教を發揮すること能はざるなり、諸宗教die Religionen の差別は其歷史的の特殊性を打破するに從ひて次第に消失して殘るものは其契合點を基礎として立つ所の唯一の宗教die Religionなり、此唯一の宗教は人をして善を行はしむべき効力を有し、如何なる社會にも適應せざることなきものなり、

八　將來の宗教と日本主義

今の諸宗教が次第に融合調和して將來の宗教を胚胎すべきことは已に之れをいへり、此宗教は日本主義と衝突することなきかといふに、決

して衝突することなし、抑日本主義は日本民族の自主的精神を發揮し、我邦人をして列國競爭の間に於て其據るべき方針を知らしむる所以なり、人は誰れしも國民の一分子にして、又同時に世界の一分子なり、日本主義は日本人が日本國民の一分子として取るべき方針を示すに過ぎず、此宗教は世界の一分子としての各自を律する所のものなり、故に彼れと此れとは兩立して毫も撞着することなきなり、或は此宗教さへあれば、日本主義は不用なりと思ふものあるべけれども、其實決して然らず、日本主義は日本民族的自衛の主義なり、苟も是れなければ日本民族の前途危からずとせず、日本主義は猶ほ個人に自存の爲め衛襲を怠るべからずと謂ふがごとし、個人は其誰れたるを問はず衛襲を怠るが如きことなかるべきも、國民は必ずしも然らず、種々なる宗教の紛爭するに當りては其誤りなきを保するを得ず、殊に我邦の現狀に就いて之れを考ふるに、實に國民自衛の爲めに有害なる思想を傳播せんと試みつゝあるもの多々之れあり、是れ日本主義の起らざるべからざる所以なり

九　結論

上來宗教の將來に關する意見は略叙述し了れり、尙ほ最後に臨んで吾人々類の生命いかんを考察せよ、茫々たる大空の中に一小星あり、之れを地球となす、地球の表面不規則にして山あり、水あり、蠢然として其間に動くものを人となす、人の宇宙間にある、實に消え失せんとするほど微小なり、然るに人たるもの、栖々逐々、唯利を是れ求め、苗として來たり、欸として去る、其生命眞に蜉蝣の如く、到底暫有的のものたるを免れず、然れども人に取りては此生命は唯一回のみ、未だ生れざるや我れなし、已に殆するや我れなし、我れのある暫時と雖も千歲の一過なり、然るに人皆昏々として、其生命の旨趣を思はず、唯塵垢の中に醉生夢死し、遂に世界の眞相を覺らず、又人生の目的を知らず、禽獸と共に、伍し、草木と同じく朽つ、亦憐むべきの甚しきならずや、是を以て釋迦、基督、孔子の如き聖人出て世に出て、各其教を布いて、世人をして其依る所を知らしむ、

其言固より相同じからずと雖も其先天内容の聲を本として人心を動かしたるは一なり然るに後人智巧を頼んで聖人の教の眞面目を蔽ひ遂に世人をして暗黒の中に迷はしむるに至れり聖人の教は畢竟心法なり即ち此心の内に感ずる所を本として立つるものなり道德の基礎は此心の内に感ずる所にあるなり總べて權利義務の如きは本と法律より來たるものにして眞の道德にあらず眞の道德は權利義務の如き交換的觀念を超絶するものなり世の學者疑ふ勿れ先聖後聖千古相傳の秘訣は唯此内に感ずる所を本とするにあるを余や蚤に宗教の何たるかに疑ありて之れを攻究すること此に年あり頃ろ彷彿として聊か心に得る所あるが如し此篇述ぶる所即ち其大意に過ぎざるなり

井上巽軒著述目錄

倫理と宗教との關係　一冊

目次―叙論―倫理學者の謬見―宗教家の謬見―倫理の根柢―宗教の根柢―宗教と道德―理想的宗教即ち理想教―結論―附錄宗教の將來に關する意見

巽軒論文初集　一冊　定價四十五錢

目次―歴史哲學に關する余が見解―日本民族思潮の傾向―老子の學の淵源―日本文學の過去及び將來―新體詩論―國字改良論―宗教の將來に關する意見

同二集　一冊　定價五十五錢

目次―利己主義と功利主義とを論ず―獨立自尊主義の道德を論ず―武士道を論じ併せて「痩我慢說」に及ぶ―認識と實在との關係―小品五篇

巽軒講話第一集 再版

一冊　定價七十錢

教育の方針に就いて—教育上の宗教道德問題—我邦德育の前途—武士道と將來の道德—道德主義としての自主獨立—清國開發意見—十九世紀の哲學—歐洲碩學談—教育の過去及び將來—女子教育談—宗教の本體に就いて—宗教及び之れに對する日本人の位置—青年の宗教に對すべき態度—青年に必要なる信念—公德と私德—道德及び宗教に就いて—教育雜感—佐々木弘綱翁の十年祭に際し、所感を述ぶ—現今の教育問題—日本社會目下の病弊—東西洋倫理思想の異同—教育上に於ける黨派心の弊害—言文一致に就いて—裸體畫論—法律と道德との關係—日本現今の新聞を評す、

增訂勅語衍義第三十二版

一冊　定價四十錢

教育と宗教の衝突 第四版

一冊　定價三十錢

菅公小傳 再版

一冊　定價三十五錢

目次—叙論—菅公の祖先—菅公の時代—菅公の事蹟—菅公の夫人及び子孫—菅公の著述—文藻—學問及び技藝—史的評論—菅公關係書類

菅公事蹟

一冊　定價十五錢

武士道

一冊　定價五錢

巽軒詩鈔 木版

二冊　定價四十錢

釋迦種族論

一冊　定價四十錢

釋迦牟尼傳

目次—序論—歷史上に於ける釋迦の位置—釋迦は如何なる種族なるか—釋迦の誕生地及び其景況—釋迦の誕生及び少時—釋迦の結婚及び出家—釋迦の苦學及び苦行—釋迦の成道—釋迦初發の說法—杖林に於ける釋迦の說法—故鄉に於ける釋迦—釋迦歸鄉後の誘化及び說法—釋迦入滅の狀況—附錄釋迦牟尼關係書類

一冊　近刊

日本陽明學派之哲學三版　一册　定價壹圓四十錢

目次—叙論—第一篇、中江藤樹及び藤樹學派—中江藤樹—熊澤蕃山—第二篇、藤樹蕃山以後の陽明學派—北島雪山—三重松菴—三宅石庵—三輪執齋—川田雄琴—中根東里—林子平—佐藤一齋—梁川星巖—第三篇、大鹽中齋及び中齋學派—大鹽中齋—宇津木靜區—林良齋—第四篇、中齋以後の陽明學派—吉村秋陽—山田方谷—横井小楠—奥宮慥齋—佐久間象山—春日潛庵—池田草庵—柳澤芝陵—西郷南洲—吉田松陰—東澤瀉—眞木保臣、鍋島閑叟等—結論—附錄一、陽明學派系統—附錄二、陽明學派生卒年表

日本古學派之哲學　一册　定價壹圓六十錢

目次—叙論—第一篇、山鹿素行—第二篇、伊藤仁齋及び仁齋學派—伊藤仁齋—中江岷山—伊藤東涯—並河天民—原雙桂—原東岳—第三篇、物徂徠及び徂徠學派—物徂徠—太宰春臺—結論—附錄一、堀河學派系統—附錄二、藤園學派系統—附錄三、古學派生卒年表

合著書類目錄

哲學字彙再版　一册　定價壹　圓

倫理教科書　五册　定價壹圓卅錢

編輯書類目錄

哲學叢書

第一卷第一集

目次—緒言(文學博士井上哲次郎)—倫理法の必然的基礎—(文學士吉田熊次)—實行倫理と宗教(文學士紀平正美)—哲學評論(文學博士井上哲次郎)—新刊批評(同上)

第一卷第二集

目次—認識と實在との關係(文學博士井上哲次郎)ロッチェの哲學

(文學士西晋一郎)哲學評論(文學博士井上哲次郎)—同上(文學士野田義夫)新刊批評(同上)

第一卷第三集

目次—哲學の科學及び宗教に對する關係(文學士虎石惠實)—認識と實踐、實在觀念と理想觀念(文學士森內政昌)二程子の哲學(文學士宇野哲人)—哲學評論(文學博士井上哲次郎)—同上(文學士野田義夫)新刊批評(文學博士井上哲次郎)

十冊　內七冊既刊

日本倫理彙編

關係書類目錄

井上博士講論集第一編　佐村八郎編纂　定價二十錢

目次—人種言語及び宗教等の比較に依りて日本人の位置を論ず—東西文化の差異を論ず、

同第二編同上

目次—歐洲哲學の近況—王陽明の學を論ず—大鹽平八郎の哲學を論ず—文字と教育の關係—國民英學會に於て—教育上に於ける迷信の害

勅語衍義考證　三石宣吉編次　定價三十錢

井上博士と基督教徒　關阜作編輯　一冊　定價二十八錢

同續編　一冊　定價二十八錢

同收結編　一冊　定價三十五錢

博士踐軒倫理的宗教論批評集　秋山悟庵編輯　近刊

29/7/37

明治三十五年十月二日印刷
明治三十五年十月五日發行

（倫理と宗教との關係）
定價金五拾錢

著述者　井上哲次郎
發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社富山房
代表者　合資會社富山房社長　坂本嘉治馬
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　青木弘
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌書肆　（明治二十九年六月設立）合資會社　富山房
電話〔特〕本局一〇三六番　電報略號（ヤマフ）

不許複製

合資會社 富山房出版圖書特約販賣店

東京	神田區	東京堂
仝	仝	播磨屋
仝	仝	寶永館
仝	日本橋區	林平次郎
仝	仝	青野友三郎
仝	京橋區	東海堂
京都	下京區	松田庄助
仝	仝	若林茂一郎
仝	篠山	小山富之助
大阪	東區	吉岡平助
仝	仝	三宅莊藏
北海道	札幌	振進堂書店
仝	仝	富貴堂
北海道	函館	魁文舍
仝	小樽	川南重衲
神奈川	横濱	弘集堂書店
兵庫	神戸	吉岡支店
長崎	市	安中虎與號
新潟	長岡	目黒十郎
仝	水原	西村六平
仝	長岡	覺張治平
仝	高田	高橋書店
仝	中頸城	川崎貞治
仝	佐渡	浦本令一
埼玉	鴻巣	長島爲一郎
仝	浦和	高野幸吉
群馬	前橋	煥平堂書店
仝	仝	文江堂書店
千葉	東金	多田屋本店

千葉	千葉町	多田屋支店
茨城	水戸	川又銀藏
仝	土浦	伊沼彌助
仝	眞壁	寺田濟兵衛
栃木	宇都宮	內田濱吉
愛知	名古屋	川瀬代助
仝	仝	永東書店
仝	仝	三輪文次郎
靜岡	靜岡市	吉見書店
仝	濱松	谷島屋書店
山梨	甲府	柳正堂書店
仝	仝	內藤書店
滋賀	彦根	廣田七四郎
岐阜	岐阜市	郁文堂
仝	可兒郡	堀田幾三郎
長野	長野市	西澤喜太郎
仝	松本	水翠堂
仝	長野市	荻原朔陽館
仝	上諏訪	日新堂書店
宮城	仙臺	藤崎書店
仝		有千閣
福島	郡山	磐岳堂
仝	會津	森萬作
岩手	一ノ關	文港堂書店
仝	盛岡	上村才六
青森	弘前	今泉道次郎
仝	八戸	伊吉商店
山形	山形市	牧野德太郎
秋田	秋田市	成見濟兵衛

秋田	大館	藤島常三郎
福井	福井市	中村六三郎
仝	仝	日新館
石川	金澤市	宇都宮源平
富山	富山市	中田濟兵衛
仝	高岡市	學海堂
鳥取	豐岡	石田松造
島根	濱田	安達共榮堂
岡山	岡山市	森博文堂
仝		竹內彌三郎
仝	津山	仁科書店
廣島	廣島市	稲善館支店
山口	山口市	小原松千代
仝	岩國	白銀伊兵衛
德島	德島市	黒崎精二
香川	丸龜	入江開文舍
愛媛	松山	土肥與平
高知	市	澤本駒吉
福岡	博多	積善館支店
仝	博多	眞海書店
仝	久留米	菊竹書店
仝	仝	田中幸次郎
仝	豐津町	佐野長七
大分	大分町	甲斐治平
仝	仝	安東平太郎
佐賀	市	河內莊助
熊本	熊本市	長崎次郎
宮崎	宮崎市	津野書店
鹿兒島	鹿兒島市	吉田幸兵衛

67-60

013784-000-5

81-664

倫理と宗教との関係

井上　哲次郎／著

M35

ABA-0274

76
184